

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和六年九月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十三卷 第六号（通卷二七〇号）

万象

B A N S Y O

九月号

2024. 9



九月の句

しあはせな八尾のをんな風の盆

島津 城子

「自分の俳句に惚れ込んで後生大事にしているも誰も鼻もひっかけない、としんから思っている私は偏曲に違いない」(句集「風の盆」あとがきより)と自他共に認める偏曲人間の城子にとって八尾の盆踊だけは特別だった。若狭から八尾へ容易な旅ではない。城子は踊りの素朴さ、妖艶さに魅了されて毎年足を運んだとのこと。話好きな俳人は踊りの輪に加わったのかも知れない。

私も数年前に訪れたが、郷愁を誘われた。城子ほどではないが、又訪ねたい。

(澤 照枝)

令和六年

九月号

万象

BANSYO

「母親」という言葉は
どこか 哀しく
どこか なつかしく
そして
とても ありがたい

詩集『母親というものは』 葉祥明

万 象

令和6年9月号

名誉主宰作品

滴 り

内海 良太 4

主宰作品

さくらんぼ

江見 悦子 5

風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満

松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子

榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩⁽²²⁾ (九月号)

小林 愛子 10

万象の窓⁽³⁰⁾ 森鷗外のこと

江見 悦子 11

同人作品

江見悦子選

12

同人会だより

食べて学んだ風木舎

吉中 愛子

32

7月の「万象」オンライン同人句会高点句

33

珈琲ぶれいく⁽⁵²⁾

34

季節風「片栗の花吟行」

藤原千代子

35

同人作品の佳句

江見 悦子

36

同人特別作品

罌粟の花

福島 吉美

38

竹の秋

塗木 翠雲

39

特別作品評（七月号）		下嶽 孝一	40
同人作品鑑賞（七月号）		中本 清	41
続・風のしをり⑨ 子規の俳句鑑賞（五） 林 徹		編集部	42
万葉の抒情⑭ 『万葉集』にたずねる抒情の源流⑭		橋本 清	43
江見悦子自選句鑑賞⑫ 髪を梳く鏡に夜の新樹かな		井村 和子	44
青虫の蛇腹むくむく梅雨の土		吉中 愛子	44
万象ノオト「橋」		中鉢 弘一・岡村 純子・入山 繁幸 売野 緑・飯田 優子・小板橋泰山	46
北から南から さつぽろ文庫「札幌歳時記」（札幌）		濱谷 和代	48
万象作品 江見悦子・内海良太 共選			49
万象作品の佳句		内海 良太	60
富士山山開き吟行		神田美穂子	62
新中央句会報（6月例会）			64
ルビーの小函（九月号）		編集部・校正担当	67
東西南北			68

滴り

内海良太

(名替主宰)

玫瑰の砂丘しほさる高まれる
大夕立沼に一筋づつ刺り
きれぎれの沼藻流るる梅雨の川
橋脚に狂へる渦や梅雨出水
よろづ屋に差し入る西日黒電話
日盛やとさか垂して神の鶏
滴りを豊かに筑波山七合目

さくらんぼ

江見悦子

(主宰)

天領の掘割ゆたか山法師
阿蘇岳のけぶれる青田水田かな
真清水を汲むカルデラの町の辻
夏座蒲団並べ一夜の氏子なり
手力男^{たち}命^を待つ蚊いぶしの神楽殿
岩戸神楽果て老杉に夏の月
健やかに双子生るるさくらんぼ

梅雨の蝶

小林 愛子

(名譽顧問)

片白草一片とんで白てふてふ
炎昼の父や胸より赤子吊り
黒き翅大きく使ひ梅雨の蝶
落し文墓の前にて開きけり
水音をさかのぼりきて夏料理
鉢突けば緋目高てんやわんやかな
夫の忌の遙かしろばなさるすべり

風音集 I

梅雨の蝶

中村千久

(編集人)

阿片秘め風の中なる罌粟の花
万緑の揺るるへアピンカーブかな
百合の香のいとうとましき夜なりけり
茶屋街の出格子奥は夏座敷
フランスパン選ぶグッチのサンガラス
墓仕舞終へし草より梅雨の蝶

宇治の院

福島せいぎ

(顧問)

少年のポケットに櫛夏来る
極楽ハアノ世ニハ無シ鰻食ふ
落し角見つけし朝の宇治の院
乙姫も太郎もゐたり箱眼鏡
舟虫や阿波水軍の港口
ゆすらうめ枝八方に墓の上

夏芝居

柳澤宗正

(顧問)

山清水歩荷運びし塩の道
水口に遊ぶあめんぼ影連れて
御捻りを座長の胸へ夏芝居
泥に抛り泥に染まらず蓮の花
道をしへ按針塚へ道半ば
引越しの卵を運ぶ蟻の列

風の盆

曽根満

(同人会会長)

箒目の深きへ秋の初風す
提灯にてるてる坊主風の盆
酒提げて峡の友訪ふ牧水忌
鷹渡る富士全容を借景に
ぼつぽつと淵の泡立ち竜潜む
杣村の鐘の響きも秋の声

夏野行く

松原智津子

(北海道)

子等去らぬ夏至の夕べの川明かり
風見鶏俄かに忙し麦嵐
砂洲迄は近くて遠し夏野行く
神輿渡御予報通りの雨の中
薔薇垣を隔ていつまで立ち話

鮎の影

亀田やす子

(栃木)

煉瓦窯より広れるキャベツ畑
川風のとききて仰ぐ青くるみ
白毛虫橋を一途にわたりけり
吊橋の下に片寄る鮎の影
庭は雨遠くの山は夕焼けて

万華鏡

沢辺たけし

(千葉)

海を指す腕のタトゥーに夏兆す
巢を落ちし子鴉跳ぬる親の声
屈伸のぼうふら伸のときひかり
万華鏡回る色目の涼しさよ
背に隠れ眼で追ふ鼠火花かな

燕の子

吉中愛子

(東京)

夏霧の塊ゆきし後の木木
日に一つ燕は卵落すなり
巢の縁を羽習はしの燕の子
炭団坂たよりの手すり灼けてゐし
一本は西へ白き矢山開き

みなみ吹く

榎本文代

(神奈川)

青梅を青く煮つめて日の暮るる
海風ぎわたり山盛りの穴子井
まつ青な茅の輪匂へり日照り雨
蘭鑄のひと揺れガラス器歪ませて
結婚の電子メールやみなみ吹く

富士山山開き

神田美穂子

(静岡)

山開き富士あはあはと翼延べ
水垢離や並ぶ裸へ富士の水
汗の顔仰ぐ富士山曼荼羅図
蚯蚓出づ村山古道の石畳
六の矢は鬼門へ富士の山開き

風の香

井村和子

(石川)

そぞろ行く小江戸城下に軒菖蒲
曲水へ小舟のごとく笹の散る
白雪姫てふ薔薇人を呼ぶ苑の径
手鏡に風の香なづる洗ひ髪
あぢさると三日坊主の独り言

六月の丘

前田貴美子

(沖縄)

ひとり来て独りの祈り夏木立
刻銘の余白平和の礎 二句を流れ夏の霧
名にふれて礎を去れり黒レース
夏霧の海よ慰霊の蝶のぼる
六月の丘に身を置くしづごころ

風音散歩 ② (九月号) 小林 愛子

風見鶏 俄かに忙し 麦嵐 松原智津子

「麦嵐」は麦秋の頃に吹くさわやかな風をいう。今から一万年前、新石器時代に始まった小麦の栽培は原産地中央アジア高原。聖書の「創世記」に登場する人類最初の作物である。日本へは弥生時代にもたらされたが、小麦粉の歴史は江戸時代からで、麵、饅頭、カステラなどがつくられた。

小麦畑といえは、北海道美瑛町などが頭をよぎる。大海原のように波打つ大地。その丘陵を彩るパッチワーク模様の小麦畑。麦秋の頃は、畑一面金色から赤茶色に波打つ。風見鶏が「俄かに忙し」と騒ぎ立てるのは豊作を囁いているのだ。

結婚の電子メールやみなみ吹く 榎本文代

掲句は、結婚の報告に電子メールを使ったというのである。はて、今まではどうしていたのか。近年は実に様様で、当事者が直接伺うのは親密な間柄か義理のあるところ、一般には書状か電話であろう。時には「二人だけで南の島の教会で結婚した」と事後連絡でびっくりすることもある。

電子メールでの報告は、コロナ以後増えたのではないかと推察する。コロナ以前は、昔だった、と思うほど世の中が変わった。「みなみ吹く」は明るく皆に祝福されている。

山開き富士あはあはと翼延べ 神田美穂子

日本の農耕生活者は霊山に対する信仰が篤く、山開きで禁が解かれ登山が許される。富士山は7月1日。現代はスポーツとしての登山が中心。「六の矢は鬼門へ富士の山開き」は同時掲載句で具体的な式典の様子を伺うことができる。

「あはあは」とした富士山、長い稜線を「翼延べ」と雄大に捉えた。荒れ狂う地球に巨人が静かに翼を休めている。

曲水へ小舟のごとく笹の散る 井村和子

竹や笹の類は初夏に古い葉を散らす。音もなく降りしきるさまには趣がある。曲水は中国からの伝来といわれ「日本書紀」に。又「今鏡」には藤原道長の私邸でも催されたところ。世界遺産の毛越寺で曲水の宴が、コロナ禍の影響で5年振りの2024年5月に開催された。句は宴ではなく流れを指す。曲水にはらはらはと散る笹を「小舟のごとく」とイメージ、流れにのる盃の賑わいを感じたのであろうか。

名にふれて礎を去れり黒レース 前田貴美子

「平和の礎 二句」と前書きのある中の一句。これは平和記念公園（沖縄県糸満市摩文仁）の中に、沖縄戦、太平洋戦争で亡くなられたすべて人々の名を刻んだ「平和の礎」を指し1995年6月23日に建設、242225名の名を刻んだ。刻まれた名に長いこと触れていたがようやく去る女性、冷たい礎、小さな名、黒レース、悲しみは海より深い。

森鷗外のこと

江 見 悦 子

森鷗外と言えば、『高瀬舟』や『山椒大夫』の短編小説を読まれた方も多いと思う。夏目漱石と並んで明治の二大文豪と呼ばれた鷗外は、漱石が40歳で朝日新聞社に入社して在野の文人の道を選んだのに対し、陸軍軍医となって以来陸軍軍医総監にまで上り詰め、晩年は帝室博物館総長兼図書頭を務める等、最後まで官の立場から離れることなく文学活動に勤しんだ。

筆者も国語科教師として、教科書の定番教材である『舞姫』を生徒と一緒に読んだが、鷗外の官職についてはほとんど触れることがなかった。この稿で書きたい「脚氣と鷗外」については、2008年（平成20）発行の山下政三著『鷗外・森林太郎と脚氣紛争』を俟たねばなりません。

日清・日露戦争時の陸軍の脚氣の惨害はよく知られている。日清戦争での脚氣患者は4万人以上、兵員の18%に及び、4千人以上の脚氣による死者を出した。さらに日露戦争での患者は25万余、兵員の25%に当り、死者は2万7千人余という恐るべき数が残っている。

対して海軍では、高木兼寛による兵食改善（洋食採用、麦飯主食）の結果、日清戦争では出動人員3千百名中脚氣患者は34名、死亡者は1名。日露戦争では、軽症患者が幾分出たが重症者はみられなかった。（人数については統計の取り方も様々で一定しないが、山下氏の著書を参考とした）

さて、軍医としての森林太郎の関与については、ドイツ留学時代まで遡る必要があります。

鍵を握る石黒忠恵（ただのり）という人物がいる。幕府の医学所で学んだ彼は、林太郎が陸軍軍医となった時の上司で、林太郎の能力を認めてドイツに留学させた大恩人。林太郎を追って、ドイツから日本にやって来たエリーゼとの問題解決にも尽力し、林太郎の最初の結婚にも奔走した。林太郎の生涯を方向づけたと言っても良く、石黒に対して林太郎はきわめて従順だった、と言われている。

以下、次号でのまとめをお許し頂きたい。

同人作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

札幌岡本敬子

御一新で開きし街の夏まつり
夏空へ少女大きく太鼓打つ
朝市の帆立は固く殻を閉ぢ
畝畝を行きて帰りに草を引く
這ひ出せるまひまひつぶり跡のこし

札幌林陽子

母の日や母の生命線長き
穂の芽の苦みや一献地酒酌む
風薫る肩の荷少し軽くして
藤の花長きは風を好みけり
雲走る空へ空へと朴の花

札幌落合裕子

二世紀を経し藤棚の香をくぐる
若楓葉陰の翼果まだ堅し
街路樹の枝払はれて棒のごと
解体の旧家の垣根鉄線花
○桜実に遺品整理のはかどらず

札幌濱谷和代

埋めつくすポプラの絮や学生街

噴水や水のひかりを鏤むる
白ばらに夜半の雨粒滴りぬ
蝦夷梅雨や動かぬままの古時計
大西日波際潮の匂ひ立つ

札幌 大内 和 憲

沼の面を打つ音あまた雨燕
○往診鞆手にして茅の輪くぐりたる
護摩堂の闇かこみたる麦の風
お百度や朱印濃く押す半夏生
覗き込む気配うしろに線香花火

札幌 紅 露 恵 子

海沿ひのゆるやかな丘麦青む
田水引き天の青さを注ぎけり
風薫る石狩砂丘に鳶の影
玫瑰や水平線の見え隠れ
夕暮のうすむらさきや磯堇
海霧晴れし港彩る大漁旗
馬駆けて空広れる立夏かな
納らぬ足窓に掛け三尺寝

札幌 大内 マ キ 子

こめかみに遠き記憶やかき氷
父の日や小さき拳の肩たたく

札幌 中 鉢 弘 一

山肌を一筋渡る若葉風
湾岸の檜の新樹の風に耐へ
離農せし開拓の跡昇り藤
ライラック大地を掴む根の強き
葉隠れに紫紺一閃鉄線花

札幌 北 浦 詩 子

踏みしむる土のやはらか新樹蔭
掃き清む箒の音の涼しさよ
芍薬の蕾ほぐるる夜半の雨
隅隅に日のにほひして夏座敷
音の無き看取りの窓に虹立てり

江別 佐 藤 哲

山鳩のいざなふ小路青葉間
初ものの金のシールのメロン切る
いとほしやボトルの水を病葉に
擬宝珠のむらさきしんと木の陰に
登山口画鋏だらけの案内板

江別 太田 佳美

南島 森山 暁湖

講読会蝦夷春蟬のキャンパスへ
濃むらさき垣を埋むる鉄線花
谷鳴^{大塚町}し白ひげの滝幾筋も
青蔦の自在に伸ぶる捨てサイロ
○汗拭きて能弁すぎる記者会見

新潟 高橋 ひろ

六月や生くれば夫もひとつ老ゆ
診察に汗疹の胸を晒しけり
噴水のしぶきの端の空の色
○夫居らず何処に坐つたとて端居
髪刈つて耳の後がふと涼し
身に当ててみて人へやる縮かな

新潟 高野 松風

北東に向く風見鶏街薄暑
剃り残るひげの手ざはりさつき雨
草笛のちよと唇のこそばゆし
鯉のあと鯰ものぼる泥けむり
しばらくは鉄に凭るる椎落葉

大空へ尾を振り上ぐる鯉幟
銀竜草森の静寂を深めけり
墓地までのゆるやかな坂草青む
大夕焼越後三山泰然と
木下閣水車休まず回りをり

益子 光岡 れい子

百年の梁に餌を待つつばめの子
姫沙羅や寺に新車の厄払ふ
白重ねかさね重たき山法師
鷺足を抜けば代田の細濁り
鑑真の墓へ菩提の花さやく

芳賀 大村 かし子

まつすぐな農道挟む青田かな
栗の花空を押し上げ匂ひ濃し
青田風下し立てなる押し車
○鉢植系に水やり終へてソーダ水
ちらちらと紅こぼしたり花石榴

宇都宮 阿久津 勝利

青田風吹き込むバスの客二人

五月晴池の底まで晴れにけり
鮎釣の老いの四輪駆動かな
薔薇の香の際立つ朝の花市場
廃線の駅に黄金の麦の風

栃木 上岡佳子

初採りの茄子にカイゼル髭跳ぬる
水番の翁木槌を振り上ぐる
青葙原巢塔の鶴のすくすくと
六月の風は草木の匂ひかな
大夕焼雲路の月を迷はせて

佐野 増田幸子

ひとこぎに揚舟の発つ麦の秋
風青し百人一首の天井画
花菖蒲夕べに近き空の色
補聴器にいつしか慣れて梅雨に入る
蟻はやし実盛像の詩碑の辺を

佐野 加藤季代

○殿には蟻の楼閣雨兆す
川音に梅雨入の兆ありにけり

一雨の来さうな気配薔薇香る
真つ向に夏至の太陽跨道橋

佐野 阿部 澄

青蘆や白木の橋の弁天堂
渡し場の草の深きや夏雲雀
グライダー着陸初夏の川向かう
座してみる格天井や薄暑光
きりもなく増え千鳥草すずやかに

佐野 芝宮留美子

夏空へ一瞬消ゆるグライダー
風涼し時ゆるやかに渡し船
黄旗上げ渡船の合図風薫る
地鳴して真夜中の地震雉子啼く
○すれちがふ人の涼しきさざえ堂

佐野 島田和枝

植田はや雲を映せる水面かな
今年竹宙を貫く勢かな
始業ベル届く天神新樹光
片隅に十葉のこし庭手入れ
夫の彫る能面の香やさくらんば

佐野 売 野

緑

初夏の光となりしグライダー
木組みより夏の日洩るる寝釈迦堂
截つて見せ翻つて見せ親燕
菩提寺の箱根うつぎの咲き初むる
青葙や尺程の亀今朝もゐて

佐野 店 網 洋

子

仕舞屋のひと際高き栗の花
暮れかかる代田に風の生れけり
桝の花戦場ヶ原ゆつくりと
万緑や路に行き合ふ異邦人
夕さりの山法師の花浮びけり

足利 大 木

茂

真夜の地震風鈴軽く鳴しけり
やはらかき棚田の畦や小豆蒔く
越前の潮芳しき夏料理
○生くる蛇鴉の嘴に空泳ぐ
蝮捕り長柄の鎌に絡めけり

土浦 澤

照

枝

白南風や浮棧橋に船の客

梅雨兆す老婦一人の畑仕事
本堂へ百段険し苔の花
日の暮の空しんとして鮎の宿
愛犬の眠る庭隅忘草

加須 茂 木 弘 子

天井画語る宮司の夏衣
紫陽花や新田ゆかりのさざえ堂
ラベンダー眠れぬ夜の枕辺に
撥ね長きうどんの「ん」の字麻暖簾
青銅の仁王へ開く山法師

さいな 山 本 右 近

石壁の蔵に浮世絵棕櫚の花
○古書店に写楽の額や街薄暑
笹舟の行く手を阻み水草生ふ
梅雨きざす屋根より高き川堤
窓あけて空を入れたり梅雨晴間

所沢 三 好 か ほ る

スイートピー摘むや巻ひげ揺しつつ
美術館出て万緑の風の中
屋根叩く音のはげしく雹降れり

海芋咲く黄金色の苞あげて

○鰻食ぶ川越城下たもとほり

所沢 南雲秀子

十葉に水琴窟の音清し

新築の槌音ひびき栗の花

コーンスープ温め直すや走り梅雨

誕生日さくらんぼのるオムライス

酒好きが餡蜜下げて訪ね来し

千葉 田中道江

松の芯雄雄しく立てる円覚寺

噴水の裸像の光聖五月

川明りとどく里見の夏木立

水音や青水無月の夜ぞ更けて

青天へすくと立ちたるアマリリス

千葉 松浦陵保

奥只見山毛櫟の森より清水出づ

○星涼し娘の部屋を見上ぐれば

リズム良し高枝よりの袋掛

梅雨しとどオランダ坂の石畳

涼風にトロッコ列車発車ベル

千葉 喜多恭仁子

総持寺の百間廊下窓若葉

べんがらの塔にあまねく新樹光

昼の蚊のしつこく来り庭仕事

蜘蛛の罫を払ふ剪定鋏かな

駅ピアノ急旋回の夏つばめ

千葉 大月玲子

あぢさるのまるまる育つ山の寺

十葉の十葉として育ちけり

路線バスあぢさるに触れ曲り来る

打ちまくる的は弟水鉄砲

兵士みな誰彼の子ぞ麦の秋

酒々井 竹澤竹里

紅花を甕にどつさり茂吉館

玫瑰や空の蒼さと海の碧

寺町の角を曲れば青胡桃

○烏瓜の花はレースの花瓶敷

山水に西瓜の浮ぶ大内宿

佐倉 内海保子

おほかたの衣類片づけ新茶汲む

紫陽花に径のせばまる阿弥陀堂
緑蔭に来て手品師の鞆置く
七尾より言葉少き夏便り
匂ひたつ大川端の栗の花

佐倉 大内 佐奈枝

名を記し並ぶ路地奥穴子めし
枇杷熟るる低く梯子の掛けありぬ
おほばこの花踏みゆけり田の神へ
夏至の日の暮れずに光る沼面かな
面会のかなはぬ術後梅雨の月

佐倉 三屋 英俊

万緑やくわつと仁王の大目玉
攻め続け蟻大物を仕留めけり
跌座仏の印の陰より縞蜥蜴
光り合ふ青葉若葉や日向雨
○水彩の空濡れてゐる涼しさよ

佐倉 横川 良子

菖蒲守屈まり苔確かむる
藻の匂ふ干潟に蟹の砂団子
参道は線路を越えて梅雨の寺

沼風の通ふ戸口に鰻裂く
常夜燈ひと巡りして夏燕

四街道 奥 太雅

迸る笕の水や鴨足草
草刈りて「まむし注意」の札あらは
帶曲輪 定家葛の花零る
老鶯に応ふ口笛いくたびも
荷の隙へ庭の新じやが十個ほど

四街道 塗木 翠雲

じやがたらの花赤土の畑一面
合歡の花村に賑ひ戻りけり
大鍋にたつぷり煮込む真竹の子
青竹に松明立てて虫送り
木木を抜け声八方に時鳥

船橋 山下 良江

日の差していよよ艶増す柿若葉
夏の朝遠サイレンへ息ひそめ
梅雨の入り雨粒遊ぶガラス窓
どの梢も若葉となれり朝の風
紫陽花の花先だけが揺れてゐる

船橋 大山 春江

嫁入りの舟へあやめの風やさし
黙黙と花殻摘めり菖蒲池
出迎へは子燕の声無人駅
海原も天も鈍色走り梅雨
青蜥蜴瑠璃のひかりを残したる

船橋 赤堀 洋子

桜木に少し乾ける梅雨茸
兜虫弁天堂へ供へあり
三重塔の相輪初夏の風
野蒜の花小学校の垣の中
菩提樹の若き実白く空に揺れ

船橋 久保村 淑子

通る度くちなしの香の新たなる
水口のしぶき離れぬ揚羽蝶
木下闇目玉張り出す藁の蛇
夏蝶や水音絶えぬ羅漢の井
緑蔭や座布団一枚四阿に

船橋 片桐 帆一

大南風畳の縁につまづきぬ

○染付けの器に盛りし胡瓜揉
木斛の花の香や庭掃除
落ち杏踏むまじ路地に二つ三つ
雷の去るを確め歩き出す

船橋 宮本 加津代

化粧塩しろじろと鮎焼かれけり
袱紗解く如くほぐれて花菖蒲
子燕にせがまれて親飛び翔てり
もう少し少しと一人草を引く
○リハビリの道とんとんと鴉の子

船橋 中嶋 久登

麦秋や前掛け新た六地藏
青鳩や磯の色変へ潮つまむ
人力車の潮来花嫁夏の蝶
鰻焼く厨房狭し爺も出て
サッパ舟両岸染むる花菖蒲

船橋 山本 とく江

万緑に抱かれてゐたり夜泣石
蛇口開け鴉水浴ぶ梅雨晴間
幣下げて真青な茅の輪納りぬ

車夫しばし憩ひてゐたり合歡の花
芸妓舞ふ如し大江戸花菖蒲

柏 内田郁代

蕨蛇の睨みをきかす木下閣
夏落葉渴ききつたる夜泣石
白秋の旧居をつつむ若楓
むらさきを極めて凜と花菖蒲
陶器市立つ万緑のど真中

柏 古川京子

五重塔の錆朱に青葉時雨かな
井戸開くる蓋半分の涼しさよ
光背は若葉の信濃観世音
栗の花にほひ残りて暮れにけり
重さうに夏の鳴飛ぶ陶器市

流山 穂刈照子

身を沈め風の底なるハンモック
噴水の空や光のシュレッダー
風を曳き影を曳きゆく夏燕
大小の石棺繫ぐ蜘蛛の糸
○太宰忌の淡くふくるる煙の木

東京 名和政代

大雷雨ネオンの消ゆる副都心
屋上にさざ波のたつ驟雨かな
校門のベンチは古し額の花
寺町の路地の湿りやアマリリス
手甲の女の腰に蚊遣香

東京 藤田裕子

焙じ茶を手を梅雨寒の午後長し
○書庫の奥六法全書の微親し
崩るるや芍薬の白匂ひ立ち
すれ違ふ口笛茅花流しかな
神域に櫛剪る音夏祭

東京 島野ひさ

○藪蚊打ち打ち一葉の井戸探す
梅雨の蝶月命日の夫の墓
緑濃き樹下のベンチに遅き昼
万緑の森に一声大鴉
猫の耳ぴんと立ちたりはたた神
ため池や黒と茶の蝌蚪住みわけて

東京 加賀葉子

わしわしと蛙の声や真つ暗闇
高窓の古き蚕室梅雨じめり
夏鶯前山背山鳴き交す
夏の大三角形や晴れ女

東京 久留島 規子

緑青の屋根はねかへす新樹光
閉ぢられて旧りし薄暑の寫眞館
陶器市何も買はずにかき氷
麦茶買ふペンキ塗れのニッカポッカ
大手毬揺して通る勝手口

東京 下 嶽 孝 一

金継ぎの伊万里の皿や初鰹
日の落ちて色を深むる白牡丹
湘南の初夏を快走真帆片帆
獲物曳く交番前の千の蟻
○流れ来る雲を離さぬあめんぼう

東京 草間 三 香 子

何も彼も忘るる里の茗荷汁
一畝のじやがたらの花小学校
雲の影乱す番の通し鴨

裏木戸を嗅ぎゐる猫や濃紫陽花
風薫る白寿の友の声弾む

東京 岡 村 純 子

法要のあと老鶯のこゑ静か
梔子の香り広ぐる今朝の供花
夏風邪や匙一杯の小児薬
八方へゆすら散らして鳥翔てり
○母逝きて片手淋しや螢狩

東京 桑原 優 美 子

青梅雨や車庫に収る消防車
図書館の広き机に夏帽子
梅雨冷の待合室に知つた顔
全身で咲いてゐるなりアカンサス
梅雨湿り鉄の匂ひの外階段

東京 三 村 紀 子

虹立つや利根川曲るところより
渋滞の車列の先に虹の帯
一日の憂ひあれこれ二重虹
青田波赤きバイクの郵便屋
剪りたてと白き芍薬五六本

東京 小池 清 晴

丸窓に覗く仏頭西日差す
蜘蛛の子の走る縁側坐禅組む
菖蒲田に鉄の音の響きたり
飛石の上に止め石苔茂る
手探りで探すぬか床茗荷の子

武蔵野 砂地 宏 子

花束は白一色や六月来
薄墨の雲の湧き来る梅雨の入り
み吉野の和漢葉舗や桜の実
傾ける夏三日月の切り絵めき
無縁墓の罅とはなれず青蜥蜴

昭島 正田 華 子

振花の素直に巻ける保育園
基地跡にただ一本の立葵
愛犬の自慢話や濃紫陽花
白白と化石の浮ぶ五月闇
母の忌や九谷の皿に五目鮓

町田 広瀬 俊 雄

青鷺の一声高く谷戸の空

幾度も山椒の木に揚羽蝶
階にこぼるるままや花棟
刈り残す土手に一本夏薊
梅の木に吹かるるまや蛇の衣

町田 桔 梗 純

青葉して無住の庭の木木太る
槌音のいつしか止みて三尺寝
青梅の坂を弾んで失せにけり
防大生駈けゆく岬花卯木
杜鵑鳴きつぐ朝や雨催ひ

日野 喜多尾 明 子

つるばらや朝餉の呼鈴高く振る
○寺に飼ふ緋目高の腹ふくらめり
棚の本減らす算段梅雨めける
枇杷一枝提げて来れり雨の客
夏至の日の白き日輪影生ます

横浜 西 本 才 子

○氏神の前より田植始めたる
産土の階段に揉む荒神輿
四阿に絵を描く翁ほととぎす

夏の蝶翅たたみたる丸太杭
薔薇垣や風ぎたる海の藍深く

横浜 大橋 雅子

大師像塗り替へられて光る夏
晋山式の五色の幕や風薫る
走り梅雨金の鯉透く濁り池
梔子の香る境内箒の目
射干の裏道の崖彩りぬ

横浜 山崎 郁子

井戸開き真水に交る夏の潮
能登瓦飛びゆく夏の嵐かな
築港に夏潮の打つしぶきかな
能登半島空き家に寄する夏の潮
能登薄暑地震に傾げる家多し

横浜 田賀 煤恵

万緑の真つ只中の静けさよ
夕風や梔子の花匂ひくる
けふの佳きこと白百合の二輪かな

○少年の言葉短し日日草
夏空へ妹真つ直ぐ逝き給ふ

雨音の静まる夜や棕解く
羅の藍の匂へり能楽堂

横浜 三木 豊子

由比ヶ浜に白波の立ち更衣
コンビニの梁を飛び立つ夏つばめ
凌霄の極みの色や落ちてなほ

川崎 大久保 進

露座仏の背の小窓や青葉風
尼寺の雨にととのふ濃紫陽花
暗転の街をさ走る白雨かな
石組みに水のささやき作り滝
道の辺のひの字のへびや桜桃忌

鎌倉 恒川 清爾

風鈴や母の小言の京なまり
○牛突きの今日も引分け梅雨に入る
宿帳に英字ハングル富士詣
父の日や父より馬齢かさねける
水無月や雨乞ひ神社毀たれて

田回りに裾濡らしたり夏の朝
横須賀 織田 みさゑ

梅雨しとど部屋に籠りて作句かな
子ら集ひ線香花火を囲みたる
おしまひは水中花火拍手湧く
大音響天竜川の花火かな

伊勢原 佐藤 和子

飛石の行き来にこぼれ花南天
末つ子は御下がりがかり柿の花
さなぶりの仕出し弁当届きたり
椎の花川の向かうにニコライ堂
道に出て蚯蚓輪となり棒となり

静岡 大村 峰子

火鉢みを向けたる利那百足虫消ゆ
花擬宝珠行者の山の登り口
容赦無く犬に踏まるる蛇莓
筒鳥の声を真近に行者径
落人の裔や風蘭垣に吊り

静岡 海野 みち子

山若葉ダム湖の水の若葉色
鐘楼の屋根より垂るる手毬花
山路の皮むく指の黒光り

吹き上ぐる湖風涼し六地藏
○葉ざくらとなりて重たき桜の枝

静岡 宮崎 知恵美

夏服のふはり渡船に乗り込めり
山うつぎ谷の暗みに真白なる
師の庭のかたくりの花開きたり
香りたる藤に触れゆく旅の人
夏空や湖に渡船の水脈広ぐ

静岡 望月 敏男

炎昼や縁切寺の門に立ち
田植終へ補植ほちちやるまいか
一族の墓を背に田植かな
紫陽花や日の出の前の一万歩
夏燕園児次次逆上がり

静岡 藤原 千代子

安倍川の朝を飛び交ふ夏燕
草刈機の石弾く音朝の土手
工夫らにバイクで届く麦茶かな
大楠の葉擦れやはたた神近し
丁寧の日傘を畳み山門へ

静岡 荻野加壽子

○麦秋や頬にひりつく旋風
ためらひ無く散る牡丹の白さかな
父の日や父は床屋に居眠れる
緑蔭や風の休んでゆくところ
葛切のさざ波掬ふ杉の箸

静岡 小川 明 美

卯の花の香りをたどり峠茶屋
尻もちの幼離さぬゴム風船
山祇へ一本残す筍掘り
水撒きの校庭けふは日曜日
午砲台跡を掠むる燕の子

静岡 藤 本 節 子

生ぬるき風を呼びたり雨蛙
八橋に傾け合へり白日傘
子燕の出入り自在や木の駅舎
独り居の母の愚痴聞く軒風鈴
父の日や仏の父に餡ころ餅

静岡 大 長 文 昭

裸婦像のポニーテールへ夏の蝶

はつきりと亡き師の声や暑氣払
防人の父恋ふる歌夏の星
ひもじさの疎開の記憶夏の草
マクベスの野外劇場青嵐

静岡 加山 ひ さ 子

半夏生青痣どこで付けたやら
かつば橋に菓子皿買へり晶子の忌
歳三の太刀大振りや雲の峰
○麻のれんのうさが三羽跳ねに跳ね
梅雨に入る雨の匂ひと地の匂ひ

静岡 石 川 裕 子

蔵店にブリキの漏斗夏はじめ
父の忌の隙なき庭の緑かな
四ツ目垣より紫陽花の濃紫
青梅や更地に残る庭の石
やれやれとふたりの夜や水中花

静岡 本多 ひ と み

沢音の明るきことよ夏兆す
夏空に鳶と鴉の一騎打
フェンス越え軌道あるかに黒揚羽

夕焼の草の径行く一人かな
受診日のハンカチーフの色は赤

静岡 杉 澤

修

紅空木岩間を滑る水白し
青葉山揺し祓ひの太鼓かな
夏空へパンパスグラス風を呼び
濡れ縁に来世の話古茶新茶
禅寺の坂に零るるえごの花

射水 成瀬 真紀子

湯気噴いて莢のそら豆焼き上る
串刺の息ある鮎を見せらるる
生簀より影のやうなる鮎掬ふ
○扇風機うなるトラック牛運ぶ
遠近に烏の騒ぐ走り梅雨

金沢 中 條 睦子

実梅落つ音聞き喰重くなる
万緑をぐらりと揺り朝の地震
竹皮の草履涼しきアキレス腱
新緑へ秘仏の闇をひらきたり
枇杷食めば水平線に七ツ鳥

○あをあをと鮎の匂ひの家灯す

金沢 今越 みち子

田植機のリモコン畦に腰おろし
青葉蔭バス停のみなスマホかな
鮎取りの光広ぐる投網かな
うるし塗りの写経机に新樹光
青蔦の額の御髪磨崖仏

金沢 伊藤 美音子

○藤房の丈ふうはりと定まりぬ
山桜桃紐長く猫繫がるる
アカシアの花咲き空の上機嫌
白きもの白く洗ひて五月晴
休め田に立ち揃ひたる蒲の花

金沢 高田 たみ子

朝の空気ひろげて摘めり夏蕨
旅立ちへ終の髭剃り柿若葉
説法の後の落語や青簾
幼児の爪ももいろに菖蒲風呂
洗ひもの乾ききつたり大西日

金沢 豊田 高子

青梅の雨粒光る婚の朝

○糶札へ気泡を放つ錦鯉

せうびんの碧を零して池の黙

奥飛驒の山雨あをあを青蛙

加賀干菓子舌に解けて朝茶かな

金沢 松井 佐枝子

天領の小さき土俵やえごの花

並足の調馬卯浪の立つみぎは

波音や日を碎くかに小判草

万緑に包まれダム湖おほいなる

糸とんぼ水辺の蘆に翹かさね

金沢 石川 純子

祭獅子荒ぶる頭口を開け

電線に止る子燕おほつかな

軽鴨の子の親の後追ふ水尾光る

○晴れ晴れと車窓とびゆく麦の秋

夏きざす暗がり坂に雀跳ね

金沢 河野 尚子

犀川に稚鮎を放し夏来る

声揃へ夏風廻す大縄跳び

旧道に煙る窯小屋合歓の花

持つて行けと籠一杯の莢豌豆

汲み置きの水に棲みつく蛙かな

金沢 道場 啓子

幼子の指に抓まれ桜の実

起伏ある硝塩道路若葉して

地震あとの瓦礫そのまま緑さす

海よりの風真つ直ぐに茅花道

○綾子百句繙く茅花流しかな

金沢 杉本 年虹

万緑や神杉に触れ風に触れ

赤シャツの男の手より黒揚羽

地物出て二日続きの豆ご飯

襖場やなんぢやもんぢやの揺れ通し

校倉の宝物殿や著莪の花

金沢 南 恵子

水飲み場夏蝶先に来てゐたり

ジーパンにあまたの穴や風青き

珠洲焼のぐい呑み下ろすみどりの夜

菩提樹の花や御亭に舟つなぎ
カクテルを少し濃くして白夜かな

金子 松下 信子

泣きながら兄追ひゆく子若葉風
二輛電車無人駅へと麦の秋
青嵐一片の紙吹かれゆく
短夜をきちんと刻み古時計
泰山木咲く陽光を余さずに

金子 北川 禮子

被災地へ戻り代掻き余震なほ
ははがりの大落採りへ鎌を研ぐ
友禅の和紙貼る傘屋緑さす
青杏落つる犀星詩碑の辺に
苺ジャム煮詰むる厨開け放ち

内瀬 塩井 志津

白山のひねもす映ゆる田植どき
サイダーの隠し味なる珠洲の塩
泉石古り水面きらりと緋鯉かな
峰雲をそびらに小碓^{おうすのみこと}命像
石組みへ松風涼し千代尼句碑

津幡 河原 昭子

潮風の優し立夏の美術館
足重き見舞帰りや新茶買ふ
指遊びのベンチの親子風薫る
郭公の声に息継ぎ磴千段
てんやわんや親燕巢へ戻る度

七尾 谷 渡 末枝

燕の子喉かがやかす朝かな
筍は竹に少年無愛想

○糸垂らすまま空梅雨の手織機
仮の家に仮の付合ひ茗荷の花
エプロンに隠す農の手夕涼み

敦賀 倉谷 ます美

陣取りのじやんけんばんや風薫る
夏場所の角番大関高揚す
巖肌を小石こぼるる男瀧
庭隅のボール拾ふ児蜘蛛の糸
睡蓮へ弥陀堂映し曾良の寺

敦賀 鶴田 勝子

とつとつと義母語る秘話粽解く

○アトリエに薬研礪く音楽の日
朴の花谷の深さを押し上げて
田を植ゑて村ととのひぬ曾良供養
曾良の碑へ空より舞ひ来黒揚羽

敦賀 中川 雅 月

葉の日蔵に看板秘伝薬
天窓の弾ける日差し夏きざす
角錐の本場の粽蒸し上る
病む母の句帖千句や白牡丹
引明けの薫風柔し厨窓

敦賀 中村 優

蜘蛛の罫のトランポリンに雫跳ね
薫風やグローブ越えて三塁打
籐寝椅子祖父の時計の竜頭巻く
味真野の里を訪ね来霍公鳥
今帰仁に甕壺埋め古酒仕込む

大阪 入山 繁 幸

木下闇ジャズの調べのサキソフォン
葭戸より隣の卓の酒談義
開け放つ土蔵の扉蚊遣香

閉店の日覆褪せし「たばこ」の字
天道虫タオルと共に取り込まれ

徳島 福島 吉美

土留めの石の隙間に春の蘭
夕風にたんぽぽの絮屋根を越す
一村の石垣染むる芝桜
外釜に茶を炒る生家とんび舞ふ
全身に湯気をまとひて白子干す

徳島 村上 和義

○紀の海へ黄土吐き出す梅雨出水
慰霊碑につかず離れず梅雨の蝶
あめんぼの踏ん張る水に力あり
泣く木偶は傾城お弓合歡の花

徳島 宮西 修一

葉桜や木洩れ日ゆるる石畳
母の日や子供磨く流し台
馴合ひの昔語りや古茶新茶
茄子植う天気予報と農日誌
仏壇の中へ飛び込む蠅虎

徳島 平岡 功

サングラス吾の猫背を正しをり
その奥にドイツ橋あり夏木立
初鰹まさに目ん玉海の色
アカシアの花の零るる船溜り
風に揺れ白波となる山法師

石井 木内 マヤ

梅雨寒や弁当箱に茹で卵
緋目高の宴のごとく泳ぎをり
夏山に影を残してドクターヘリ
雨垂れのリズム優しき子の昼寝
もくもくと雲もくもくと夏来る

小松島 岡田 あゆみ

山荒しの針の輝く立夏かな
オルガンに合せて起立昭和の日
搔き寄する軽さの常盤木落葉かな
放流やあつといふ間に散る稚鮎
散水機回るグラウンド燕来る

室戸 安岡 みさき

お遍路へ持たす大きな握り飯

まつ先に杖が降りたる遍路バス
岬に嫁し海女となりたり天草干す
屋根低き岬の家家青嵐
遺骨なき漁夫の地蔵へ花大根

長崎 丸本 祥夫

白魚のはらに透けたる指の腹
一瞬の眩しさ放ち初燕
大川の閘門閉ざし雛流し
強と弱行つたり来り春炬燵
お絵描きは林檎畑の花の下

西海 山下 敦子

夕暮の田を挟み鳴く時鳥
葉桜の奥に小さき寺の屋根
空の中にある心地して夏野かな
木苺の出てくる祖母のポケかな
田の面に漣昨日梅雨の入り

宮崎 中山 宣

根太に莫塵敷く古民家や半夏雨
里若葉鬼の窟に風吹けり
草原に壁蝨に振り落す岬馬

夏草に岬の馬の跳ね上がる
裏木戸に朽ちし唐箕や河鹿笛

宮崎 中 山 芳 教

薄闇や鎮守の杜に青葉木菟
荒梅雨や線状降水帯の文字
老鶯の声杜深く消えゆけり
自在鉤揺るるいろりや夏座敷
梅雨湿り古民家納屋の唐鍬^{とうが}かな

宮崎 鳥 居 達 史

蛇の目傘弾くトレモロ夏の雨
茄子の花素描ににほふ農日記
湿原の木道朽ちて梅雨茸
枇杷の種ぷつと飛せり十二歳
焼きたてのパンぱちぱちと夏季講座

那覇 大 湾 宗 弘

箸立てと箸置薄暑の風湿り
返信の切手を舐めて夕薄暑
雨雲を捕へ大女郎蜘蛛太る
鎮魂の今日六月の土匂ふ
人影のこげる臭ひの暑さかな

○道をしへ追うて戻らぬ子の話

那覇 中 本

沖縄忌路地の白砂を掃き清め
降伏ビラ踏みて逝きしか芒種南風
夏ぐれの街に古りゆく昭和かな
○バー街の角を曲れば雲の峰
黒南風やタトゥーショップは路地の奥

西原 宮 城

勉

メビウスの帯を大きく夏燕
ちらし食ふ郵便受の蝸牛
吉兆と庭師のしまふ蛇の衣
母の忌の雨のあぢさる藍あはし
母若く吾老いけらし沖縄忌

ベルン 鈴 木 波

江

猫出してついでの散歩朝曇
ポスターの首相に髭の生えて夏
また一つ閉ぢし店あり額の花
鴨の子の一羽が跳べず池のふち
夏暁や鼠くはへて猫帰る

清

同人会だより

食べて学んだ風木舎

吉中愛子

風木舎「万象」の師系である沢木欣一時代の「風」発行所へ校正に伺っていた頃の想い出。

我が家からは車で50分。大抵一番に着く。沢木先生が朝食をとられていた時、「コンビニでハムを買って来て」と頼まれたことも。風木舎には全国から地産の珍しい山の物、海物が届いていた。

その日は金沢から大振りのオニオコゼが二匹届いた。「これを刺身と煮つけにして欲しい」と頼まれた。

虎魚の肌はぐにやぐにやで掴みどころがなく、庖丁を選ぶ。ありあわせの庖丁では難しい、が試みた。何とか様になった。後は食器。戸棚に積み重なったお銘入りの焼物があり、益子焼の丸皿には煮つけを、九谷焼には刺身を盛り付けた。

その頃の沢木先生はあまりお元気ではなく、よく休んでいらした。酒盛りが始まった頃に見えて少し刺身を召し上がった。「煮つけた虎魚の目の周りの身は特に美味しいですよ」というと「そこは取っという」と言っただけで休まれた。暫くして、お元気になられたのか、さつきまでとは違う姿で、除けておいた虎魚の身を美味しそうに召し上がられた。

あの日の幸せそうなお顔が、今に繋がっている俳縁の源となっている。

令和七年版 俳人協会編「俳句カレンダー」

内容

表紙 表紙とも13枚綴り壁掛け
表紙 鷹羽狩行

内海 良太・小川 晴子・茨木 和生・才野 洋

白濱 一羊・藝目 良雨・福神 規子・安立 公彦

鈴木しげを・三浦亜紀子・村上 綱彦・安原 谿游

安田のふ子・加藤 耕子・三田ええ子・中坪 達哉

田中 春生・能村 研三

(掲載月順) 表紙を含み541句掲載

(ジュニアの俳句12句掲載)

「万象」からは江見悦子・中村千久・榎本文代・今越みち子の句を掲載

頒価

1部 1200円
1部 750円/2部1050円/3部

1100円(昨年の郵便料金)

4部以上については実費(宅配便)

※十月一日より郵便料金の値上げがある予定ですが、現在料金については不明ですのでご了承ください。なるべくグループでお申込みください。

発送予定 10月上旬より俳人協会より直送されます。

申込先 〒113-0021 東京都文京区本駒込6-5-14 206

TEL 080-5485-1626

E-mail: ymkuwa@fusosai.co.jp 桑原優美子

発送先の住所・氏名・電話番号・申込部数を明記のこと

申込締切 令和6年9月9日

※発送先が数カ所になる場合は、それぞれ列記してください。

※後日、代金と送料を請求しますので、左記に送金願います。

振込先 ゆうちょ銀行からは記号10150 番号1156881

他金融機関からは店番〇一八(ゼロイチハチ)

普通預金 口座番号115688 口座名義スナジヒロコ

【12点句】

風の読む胸の詩集やハンモック

下嶽 孝一（東京）

【10点句】

母逝きて片手淋しや螢狩り

岡村 純子（東京）

【7点句】

隣田へ片足預け棚田植ゑ
竜宮城洗ひ金魚の水替ふる

曽根 満（静岡）
山本 右近（さいたま）

【5点句】

枇杷もぐや水平線は潮ぐもり
村中の明りを消して螢祭
山清水歩荷通ひし塩の道

神田美穂子（富士）
村上 和義（徳島）
柳澤 宗正（横浜）

【4点句】

流木に時の影濃き慰霊の日
でで虫の来し方しるす銀の地図
夕べ鳴く姥捨山のほととぎす

荻野加壽子（静岡）
平岡 功（徳島）
大木 茂（足利）

【3点句】

味噌汁の生麩ふくらむ梅雨入りかな
泥に抱り泥に染まらず蓮の花
墓仕舞終へし草より梅雨の蝶
星あはし咲きのほりたる烏瓜
田草取り股間を戦ぐ苗の丈
段 畠 夕 立 後 の 獣 臭

南 恵子（金沢）
柳澤 宗正（横浜）
中村 千久（志木）
増田 幸子（佐野）
谷渡 末枝（七尾）
谷渡 末枝（七尾）

水揚げの鯖青青と放らるる
夏帽の胸に小さな夏帽子
ほうたるや極楽橋のむかうより
水遊び子は総身を笑顔とし
サイレンの音に寝返る熱帯夜
跳べさうで跳べぬ小川や青胡桃
朝型も夜型もをり熱帯魚
嬰兒の透き通る目の涼しさよ
デモでなし遠足でなし蟻の列
奥能登の復興遅遅と半夏生
西日差す買ひ手の付かぬ古家に

内田 郁代（柏）
奥 太雅（四街道）
杉本 年虹（金沢）
穂苅 照子（流山）
大久保 進（川崎）
佐藤 和子（伊勢原）
荻野加壽子（静岡）
三屋 英俊（佐倉）
曽根 満（静岡）
塗木 翠雲（四街道）
桑原優美子（東京）



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に虫偏の付く漢字を入れてみましょう。

- 1 キヤスリンバトル□立つやうに唱ひたり
- 2 日盛りに□のふれ合ふ音すなり
- 3 青□おのれもペンキぬりたてか
- 4 ひとすぢの秋風なりし□遣香
- 5 全長のさだまりて□すすむなり
- 6 □□に生れ網をかけねばならぬかな
- 7 民宿の特別室の□叩
- 8 落□のいのち抜けたる軽さかな
- 9 □壺やはかなき夢を夏の月
- 10 うらがへし又うらがへし大□掃く
- 11 □の列しづかに□をうかべたる
- 12 啓蛰の□□の紅のすきとほる

【正解】

- | | | | |
|-----|------|--------|-------|
| 1 虹 | 2 蝶 | 3 蛙 | 4 蚊 |
| 5 蛇 | 6 蜘蛛 | 7 蠅 | 8 蟬 |
| 9 蛸 | 10 蛾 | 11 蟻・蝶 | 12 蚯蚓 |

思い出す人々

西山 厚 全24回

第19回 【南方熊楠】

平安時代に東大寺の大仏の頭が落ちた。

元に戻すのは大仕事。それをやり遂げたのは真如親王（高丘親王）だった。真如親王はそのあと唐へ渡り、さらに真実の仏法を求めてインドへ向かうが、マレー半島あたりで亡くなった。のちの時代になると、虎に食われたと言われるようになる。

滋澤龍彦の奇書『高丘親王航海記』では、病んで死期を悟った真如親王は、みずから進んで虎に食われ、虎の腹中に納まってインドに至ろうとする。

滋澤龍彦のノートに「虎に食われる＝天に上る」とあるのを見つけた。南方熊楠の著作からの引用だ。

昭和四年（1929）、昭和天皇が紀州の神島の植物観察に訪れた際の案内役が南方熊楠だった。雨の中、ふたりは濡れになって歩いた。このあと熊楠は、110種の粘菌を昭和天皇にプレゼントした。粘菌は森永キャラメルのパール紙の箱に入れられていた。

雨にけふる神島を見て

紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ

昭和天皇の御製にみえる個人名はこれだけらしい。

季節風「片栗の花吟行」

藤原千代子

季節風の吟行は、コロナが第五類に移行した令和5年から再開し、5月には葛飾北斎の「富嶽三十六景」に描かれた富士市の3カ所を、11月には楽寿園、三島大社と暦師の館を吟行した。令和6年は、4月1日に22名が参加し、大井川漁港、蓬萊橋、牧之原公園を吟行した。

大井川漁港は、大井川の河口左岸にある焼津市の港湾である。砂利、砂の供給基地として、さらに石油製品や重油、セメント需要にも対応する配分基地でもある。私たちが、漁港の職員の説明を聞いている間にも、一隻のタンカーが入港してきた。また、春から夏にかけては、駿河湾でしか獲れない桜蝦と、前浜では白子漁が始まる。我々のバスが港に着いたのは水揚げのあとで、糶場に零れた僅かな桜蝦がみられた。また糶場では煙草をふかし休憩しながら談笑する糶人達がいた。暫く漁港を自由に吟行の後、燕の飛び交う漁港を後にして、大井川の中流に架かる「世界一長い木造歩道橋」(897・4メートル)の蓬萊橋へ移動する。蓬萊橋は観光ばかりではなく、現在も農道として利用されている。当日は風が強く、特に橋の中央に近づくにつれ、飛ばされそうになり、対岸まで行くのは危険とみなし皆途中で戻ってきた。前日の雨の影響で、川の水は濁り、水量も多くごうごうと音を立てていた。

この橋は国内でも数少ない「賃取り橋」として有名である。

次は片栗の花の群生地として有名な牧之原公園へ向かう。

故浅場英彦先生が、片栗の花が大好きだった闘病中の芳子先生を、「治ったら牧之原の片栗の花を見に行こう」と励まされた所である。そして句集「十団子」と浅場家の墓誌に「かたくりの花と吹かれて妻近し」の句を残されている。今回の吟行も、両先生を偲びつつの片栗の花吟行となった。

今年は大井川を望む斜面が紫に染まるほど片栗の花が咲いていて、皆、感動したようである。この公園には茶祖「榮西」の像がたてられていて、周囲は一面の茶畑が広がっている。新茶の季節になれば一面さみどりの茶畑に茶摘みの風景が見られる。

公園内の施設を借り一人5句投句で句会を行った。帰りのバスの中で句会の続きをし、自由に当日句について意見の交換をして、充実した吟行会となった。

泰平や鶯を聞く石畳	高橋一夫
茶祖像の見送る台地や風光る	杉澤修
鶯の声のびやかや大井川	石川裕子
蒙古風蓬萊橋のど真ん中	大長文昭
糶終へてふかす煙草やつばくらめ	藤本節子
片栗の花地の声を聞く形	荻野加壽子
片栗の花に囲まれあて無言	藤原千代子
木洩れ日や千の堅香子傾れ咲く	神田美穂子

同人作品の佳句

江見悦子

汗拭きて能弁すぎる記者会見 太田 佳美

TVの映像だろうか、最近こんな場面をよく見るようになった。政治家、官公庁の首長、企業経営者等等。通り一遍の謝罪と弁明はいかにも能弁だが、額の汗を拭きながらの説明は胡散臭くも思え、信じられないものも多い。「汗拭きて」という具体的な描写が生きた。作者の社会性豊かな批判精神に共感した。

夫居らず何処に坐つたとて端居 高橋 ひろ

季語「端居」について歳時記には「夏の夕方など、室内の暑さを避け涼をもとめて、縁側や窓辺近くに出てくつろぐこと」とある。

夫が共に一つ家に住んでいた時には、妻のくつろぐ場所は決まっていた。夫が亡くなったからは家の中はがらんとしてどこに座ろうと構わなくなったものの、逆に居場所がなくなったようにも感じられる。哀切な「夫恋い」の句に、ひろさんの哀しみを思う。

殿はいつも有耶無耶 蟻の列 加藤 季代

なるほど、蟻の列とはこうしたものだ、と納得させられた。フランスの作家ジュール・ルナールは『博物誌』の中で「蟻」と題して、「一匹一匹が、3という数字に似ている。そ

れも、いること、いること！ どれくらいかというところ、333333333333……ああ、きりがなし」と表現した。「有耶無耶」の漢字表記も含め、機知に富んだ面白い句となつた。

すれちがふ人の涼しきさざえ堂 芝宮留美子

「さざえ堂」については、昨年10月号の「同人特別作品」に、加藤季代さんが「上州栄螺堂」と題する10句を発表している。作者が訪ねたのも、この曹源寺観音堂だろう。

栄螺の殻のように螺旋状に回りながら上り下りする建築様式からこう呼ばれ、堂内には坂東、西国の観音札所計百力寺の観音像が安置されている。回廊式で同じところを二度通らずに元に戻る構造となっていて、所所で行き合う場所があるとは、作者の芝宮さんの話。

観音像を拝したあとの心の安らぎに、ふっと涼しさを感じた作者。すれちがう善男善女も良い顔をしている。

リハビリの道とんとんと鴉の子 宮本加津代

足のリハビリでいつもの道を歩いている宮本さん、ちょうど鴉の子が跳び歩いているのに出会った。それを「とんとん」と擬態語で表現した。鴉の子の軽やかな足取りがかわいらしく、作者を励まし先導してくれるかようだ。鴉の子との一体感と親愛の情が優しい。

書庫の奥六法全書 藤田 裕子

「六法全書」は、憲法・民法・商法・民事訴訟法・刑法・刑事訴訟法を網羅し、毎年発行されている大部のもの。

書庫の奥に眠っていた六法全書、偶偶取り出してみたら表

紙や背表紙等に徴が生えていた。その徴を「親し」と表現した作者。かつてはひんぱんにページを繰り、試験にも備えた六法全書なのか。若い日目が懐かしく思い出される。

流れ来る雲を離さぬあめんぼう 下 嶽 孝 一

水面に映る雲の影の流れ、その雲の上を長い脚のあめんぼうが移っていく。それを「雲を離さぬ」と詠んだ。水生昆虫であるあめんぼうが、大空を流れる雲を離さず掴んでいるという発想に意外性がある。あめんぼうの擬人化も成功した。

寺に飼ふ緋目高の腹ふくらめり 喜多尾明子

かつては肉食妻帯が許されない等、仏教の修行者には厳しい戒律があった。その修行の寺に緋目高が飼われている。気が付くと緋目高の腹が膨らんでいる。妻帯の許されない寺の緋目高、と考えると何だかおかしい。俳味のある句。

葉ざくらとなりて重たき桜の枝 海野みち子

分かりやすく素直な句。冬芽から始まる桜の木の変化を、蕾、満開、落花を経て葉桜の季節になるまで見届けた作者。葉桜となつて初めて、桜の枝の重さを感じたという、作者ならではの発見、認識の句である。

あをあをと鮎の匂ひの家灯す 中 條 睦 子

香魚と呼ばれる鮎は、秋に川で産卵後、孵化して海に向かい、翌春稚魚となつて生まれた川に戻り、藻類を食べて大きくなる。西瓜や胡瓜のようだとと言われる鮎独特の匂いは、川ごとに違うようだ。

掲句の「あをあをと」という形容は、何を修飾しているのか。「鮎の匂ひ」を表現しながら、「家灯す」に掛かっている

ようにも思う。視覚と嗅覚を生かし、一夜の鮎の宿の在り様を、詩情豊かに美しく詠んだ。

糶 札へ気泡を放つ錦鯉 豊田高子

訪れたのは、錦鯉発祥の地として知られる新潟県の山古志村あたりか。江戸時代後期、冬場のたんばく源として飼われていた真鯉が突然変異で色鮮やかな鯉になったのが始まり。今では100種類もの錦鯉が繁殖され、海外からも買付にやってくる「国魚」である。

水槽を泳ぐ見事な錦鯉に次次に買い手がつき、酸素を入れたビニール袋に入れられて運ばれていく。「気泡を放つ」と詠んだ具体性が、活気ある現場の空気を伝えている。

アトリエに薬研礪く言葉の日 霜田勝子

「薬の日」は、季語「薬狩」の傍題。この季語を初めて知った。陰暦5月5日に薬草や鹿の袋角を採取すると特別な効能があるとされる。この句、薬種を押し砕く薬研の音がアトリエから聞こえるという、意外性のある句。

道をしへ追うて戻らぬ子の話 大 湾 宗 弘

ただならぬ句だ。沖縄の地を外しても、「追うて戻らぬ子の話」とは、多様な解釈を許す。季語「道をしへ」は斑猫のこと。人が近づくと飛び上がり、降り立つと振り返るような仕草で人を誘う案内人のような甲虫。グリム童話の「ハーメルンの笛吹き男」を連想した。「戻らぬ子」は戦禍に倒れたのか、誘われるまま故郷を捨てたのか等等。「道をしへ」が秀逸。

罌粟の花

福島 吉美

罌粟の花墓地の四方に飛び咲けり
 玉葱を吊す釘打つ勝手口
 あるなしの風に震へる檜若葉
 アルコール噴きて小梅に塩まぶす
 糸引きし蜘蛛が宙舞ふ冠木門
 早苗田に片足立ちの鷺一羽
 足場組む日焼きはまる少年工
 走り根に隠れどんぐり芽吹きたる
 おから炒る厨の窓辺とんぼ飛ぶ
 梅雨の寺大笑ひして句会閉づ



俳句は眼前にあり、という大坪景章師の言葉をいつも心にとめている。そのため、句会が近づくとわが家(寺)の境内を散歩する。いつも同じ場所を見ていると感動は薄れてくる。しかし、まれに非日常の光景に出くわすことがある。例えば、捨て猫、鼬、狸、餌を盗みに来る白鼻心等に出合う。ちなみにわが家は町の中にある。いまだに彼らの住処はわからない。孫たちの記念樹や墓地の野草も良い句材になっている。身近な材料で俳句を楽しみたい。

竹の秋

塗木翠雲

療養所跡に散り敷く紅椿
花の雲ハリス藩主の像の上
鍵の手の多き町屋や花ミモザ
春の月くらやみ坂を灯しけり
寺守の庵主差し出す甘茶かな
外濠に風の形の花筏
堀深き馬出し濠や花の塵
大手門跡の広場の草青む
昼暗きひよどり坂や竹の秋
武家屋敷裏の畑の二輪草



旧佐倉藩は11万石の城下町で、佐倉城は慶長年間に土井利勝によって江戸東方の防備の要として築城された。明治時代に廃城となり、跡地は陸軍の営所となった。幾多の変遷を経て城址公園となり、国立歴史民俗博物館が建てられている。

馬の背の台地に築かれた城下町には、藩主の菩提寺甚大寺を含めて14の寺院が残っており、市民の信仰の拠り所となっている。その城下町を折に触れて訪れている。私には絶好の吟行地である。

鷹

西本才子

横浜市西区在住の西本才子さんは「句会へ行くのが楽しみになり良くても悪くても句会は楽しい。俳句を続けてきて本当に良かった」と言われる。今回は友人に誘われ、岐阜県中津川に近い八菅山の麓で句を詠んだ。

鷹 一つ 八菅山の空を高舞へり

青空に八菅山が紫に輝くこの近くにかつて師と吟行に來た事を懐かしく思い出し、上空高く舞う鷹を見た。

実千両庭の高みに屋敷神

この辺りは山岳信仰の靈地で地元の人々は今でも神式で生活を送っているという。訪れた家の実千両の生る庭の高みに屋敷神が祀られているのが見られた。

神官の家に庭師や小晦日

案内された神官の家に庭師が来て作業をしていた。小晦日は大晦日の前日で陰暦12月29日を指し、新暦では2月8日に当たるので作者はその頃訪れたのであろう。

池 一つ 鯉を沈めて冬の水

作者は案内してもらった俳鯉を飼う家の二つの池で寒い冬の水に鯉が池の底にじっとしているのを見た。

草萌や牛放ちたる土手の下

作者の訪れた2月頃は大地から草の芽が萌え出る頃で青む土手の下を放ち飼いの牛が草を食んでいた。

網に獲るわかさぎに雨募りくる

「募りくる」はますます激しくなることで、作者は雨の中で網によるわかさぎ漁を見ているのだらう。

桜人

砂地宏子

東京・武蔵野市在住の砂地宏子さんは「動いていると俳句が浮かんでくる。散歩や買物でも空が雲が動く。風に揺れる木木等それらが私の心を躍らせリズムとなる」と述べている。今回は奈良・飛鳥・吉野等を巡るバスツアーに参加して皆と一緒に桜を追い、句を詠んだ。

集ひたる老若男女桜人

バスツアーに参加して共に桜を見つめた人人の目の輝きや歓声はどれも忘れ難い光景となったと作者は言う。

階を観音堂へ朝桜

奈良県明日香寺には飛鳥の大観音がある。作者は厳肅な朝の廻廊を観音堂へ向かい朝桜を愛でたのだらう。

線刻の仏の供花や山桜

線刻とは石に意匠や文字が刻まれた彫刻を指す。奈良の大野寺には国内最大の線刻弥勒摩崖仏がある。作者は摩崖仏を彩る満開の山桜を供花と捉えたのであろう。

又兵衛は風吹くままに花吹雪

又兵衛桜は奈良県宇陀市にある枝垂れの一本桜で樹齢三百年で「本郷の滝桜」とも呼ばれる。戦国武将後藤又兵衛の屋敷跡にあると伝わる事から「又兵衛桜」と親しまれている。作者は風に舞う花吹雪を楽しんでいる。

下中と奥へ空へと山桜

山に咲く桜で古今和歌集等に詠まれている。葉は卵型で若葉は赤褐色、新葉と共に白花を開く。吉野山の桜もこの種類である。満開の時期に來られた事を喜んでいる。

同人作品鑑賞（七月号） 中本 清

春浅し壁に古りたる熊の皮 高野松風

「熊の皮」の実物を見たことはないが、豊富な毛量があり、黒くこわくわとした質感を持つものだろう。もしかすると、獣の匂いも残っているのかも知れない。立春を過ぎても、寒気が何度もやって来る。春らしい春にはまだ遠いようである。あたりの春色はまだ整いを見せない。「春浅」き壁に「古りたる熊の皮」をぶつける。気配と具象が響き合う。

あと一花標本木へ首のばし 山本右近

気象庁は、北海道から沖縄まで全国各地で桜の開花宣言を行っている。桜の開花状況を観察するための「標本木」は、全国で58本。桜の開花は「標本木」のつばみの内、5輪から6輪の花が咲いた状態を指す。「あと一花、あと一花」とつぶやきながら桜の開花を待ち望む。「首のばし」の期待が滑稽で楽しい。

揺り椅子にひねもすうつらうつら春 藤田裕子

花見で疲れたのか、揺り椅子に身を預けると、春の暖かさに誘われて、いつのまにか睡魔が体を包みこむ。この情景を

やわらかい言葉で、春の穏やかな景に焦点を当てた。「揺り椅子」に「うつら」の同語の繰り返しが音調に効果的だ。揺り椅子は、寝てしまうと動きを止める。目覚めるとまた動き出す。

春耕や一鍬ごとに土目覚め 藤本節子

春が訪れると、農作業が始まる。種を蒔いたり、苗を植えたりする前に、まず田畑を鋤き返し、柔らかくする。そのとき、一鍬ごとに、畝の裂け目に微かな春の色を感じた。土の艶やかさを見つけた。農作業をする作者は、一瞬の感動を覚えた。この感動を「土目覚め」と擬人化することで、大地の光に満ちた命を感じさせ、豊かな春の到来を表現した。

蒙古風蓬萊橋のど真ん中 大長文昭

古代の日本人は、春になると中国大陸から風に乗ってくる土埃に蠶という難しい漢字をあてて、「つちふる」と呼んだ。「蒙古風」とも呼ぶ。作者は、静岡県にある全長約900メートルの、世界で一番長い木造歩道橋「蓬萊橋」の「ど真ん中」に立つ。川面を渡ってくる蒙古風に立ち向かっている。掲句は、適切な隔たりを置く濁音（ぜ、ば、ど）の調べが印象に残る。筆者自身もかつて北アフリカのサハラ砂漠で熱砂（ギブリ）に立ち向かった経験がある。風に向かって屹立する作者の心意気に、筆者も共感する。

子規の俳句鑑賞（五）

林 徹

しぐるゝや蒟蒻冷えて臍の上

明治二十九年作。「病中二句」と前書して、

小夜時雨上野を虚子の来つゝあらん

と並記してある。おんあみだ温罨法のため腹にのせていた蒟蒻がさめて冷たくなったことを言っている。「臍の上」と、写实的に詠っている点がよい。腹のまん中であって、形状的にもユーモラスで、何となくもの悲しい臍が利いている。この句が、滑稽味を伴いつつも哀愁を漂わせているのは、臍の上と述べた言葉の働きによると言ってもよい。時雨とよく合っている。

いくたびも雪の深さを尋ねけり

明治二十九年作。この句も「病中雪」と前書してある。

雪ふるよ障子の穴を見てあれば

雪の家に寝て居ると思ふ許りにて

障子明けよ上野の雪を一目見ん

が同時作。

病床にあつて、雪が皆さんと降るのが、障子の穴からは見えるが、積もり具合までは見ることができない。東京の雪だから、いくら雪が積もっても、そのために家がどうなるというわけでもないで、雪の深さをいくたびも尋ねるのは、心配してきいているのでないことは当然で、今は二寸くらい、今は三寸くらい、と母や妹が答えるたびに、雪景をただ心に描いて楽しんでるのである。さらつと詠っているが、実にあわれな句である。

前年はまだべつたりと臥せるという病状ではなかったから、〈庭の雪見るや廁の行き戻り〉という句を詠み得た。この句も雪に惹かれる子規の自然な姿が表れていて好ましい。

梅の木に近く其木の梅を干す

明治三十年作。子規の庭には梅はなかったはずだから隣家の景かも知れぬし、回想かも知れぬ。梅の木うめの近くに筵むしろをひろげて、その木になった梅の実を干しているというのである。子が親のそばに在るようで、それが意図してなされたことではないだけに、嫌味がなくて面白い。

（次号につづく）

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ⑭

橋本 清

近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば

心もしのに 古思ほゆ (三・二六六)

「近江の海の夕波千鳥よ。お前が鳴くと、気が滅入って
くるほど過ぎ去った日々のことが偲ばれてならない。」

柿本人麻呂が琵琶湖のほとりで詠んだ歌です。たそがれ
時の湖岸をさまよいながら、夕日の照らす波の上を飛び交
って鳴く千鳥の声を聞いていると、昔のことが思い出され
て切なくなってくるということです。

「心もしのに」は、気力が萎えてぐったりとすること。

つまり、気が滅入ってくる状態を表す副詞。こゝは、「心
もしのに」なるほど「古思ほゆ」ということで、胸が締め
つけられるような切ない気持ちを強調しています。シノニ
は、「秋の穂をしのに押しなべ置く露の」(十・二五六)と
いう例から分かるように、ぐったりと萎えしおれる様を表
す副詞。

結句の「古」は、天智天皇の近江大津宮の時代のことを
指しているとする解釈が定説になっています。人麻呂には
荒廃した近江の都に立ち寄った時の歌(二・二九一三)が
あるので、一応うなずける解釈です。ただ、題詞には「柿
本朝臣人麻呂歌一首」とあるだけなので、懐古の対象を近

江朝の時代に限定しなくてはならない理由はありません。
こゝは、廃墟になった都を目にし、心が沈んでいた時、
千鳥の鳴く声に刺激され、自らの過ぎ去った日々のことど
もを思い出しているとする方がよいのではないか。「古」
を自分自身に直接かわる過去のことと受け取ると、その
感慨も一層切実なものとなり、シノニという、身体に直接
響くような感覚を表す表現が更に生きてくるのではないか。
後世の詩人たちは万葉学者の考証などにおかまいなく、
この歌から切々たる郷愁の情を感じ取っています。萩原朔
太郎は、人麻呂の旅の歌には「郷愁の人に迫る音楽」があ
り、わが国の詩歌の歴史において「唯一の巨大なる歌聖で
あり、真の抒情詩的抒情詩人の典型である」と称揚してい
ます(『恋愛名歌集』岩波文庫)。

林古溪が大正二年(一九一三)に発表した「浜辺の歌」は、
大正五年、成田為三によって曲がつけられ、今日も愛唱さ
れている歌謡です。作詞者にその自覚があったかどうかは
分かりませんが、水辺を逍遙しながら昔を偲んで郷愁にひ
たるという人麻呂の抒情を受け継いでいるものと考えます。

あした浜辺をさまよへば 昔のことぞしのぼるる
風の音よ雲のさまよ 寄する波も貝の色も

ゆふべ浜辺をもとほれば 昔の人ぞしのぼるる
寄する波よ返す波よ 月の色も星のかげも

(以下、次回)



髪を梳く鏡に夜の新樹かな

〔砂時計〕 157

悦子第二句集『砂時計』は、『万象』第四代主宰に就任された令和4年秋の上梓、喜ばしい慶事であった。句集には、平成25年以降の作品群から、自選の300句が収められている。

「風」を原点に即物具象の写生を深め、新しみのある俳句を目指すとして作者の力強い念を心に留めて「砂時計」を繙き、「丹波栗」の章（令和3年作）に至った時、「風」時代の偉大な恩師、欣一・綾子・純子の三人の師へ心寄せる俳句が次々と目に止まり、私の胸を揺らした。

〈落葉みな影持つ朝欣一忌〉（師の句碑に並びし丹波栗三つ）（純子句碑肩まで加賀の深雪かな）の三句。

「丹波栗」の章は、作者が主宰に就く前年の作品。大任を継ぐべきかと揺らぐ心情を、三人の恩師に問い、激励されたのであろうかと、深い師弟の絆がほのぼのと感じ取られた。

呈示された掲句の鑑賞が遅きに失したが……。髪を梳くことは何でもない日常茶飯の一瞬。涼やかな夜風の渡る窓辺の三面鏡の前に、洗髪を梳く己が身の映像を直に描写するのではなく、窓の外、夜の静けさの中に点る新樹の影を鏡に配した妙、情趣を湛える。多忙な日常の暮しの中にあつて、充足感が伝わってきて、心象風景の写生句とも言えるかの一句に魅了された。

（井村和子）

青虫の蛇腹むくむく梅雨の土

〔砂時計〕 52

江見主宰のゆるやかな平常心の会話は心地良い。

第二句集『砂時計』のあとがきに、第四代の主宰としての方向がしっかりと示され「俳句実作の態度・方法としての即物具象の写生」を更に深め、「個性と新しみのある俳句」を目指していきます」と記してある。

第一句集、第二句集と連続してみた。変化を求め続けた「砂時計」には、確かにその変化を感じた。

基礎を徹底的に叩き込んで来られた後の作品群は、めざす「新しみ」の根幹となっていることを思う。

この作品の前後には海外詠も多く、果敢に旅を楽しまれたようだ。さて掲句の「青虫」は歳時記では秋の季語だが、ここでの季語は「梅雨」である。青虫も蝶も年中見かける。辞書によると青虫から蛹になりその期間は様で蛹のまま越冬することもあるようだ。幼虫には青虫・芋虫・毛虫などがあり、一般的に青虫は蝶になり、芋虫・毛虫は蛾になる事が多いという。青虫のくびれを（蛇腹）と捉え、その蛇腹を引きずる動作を「むくむく」と写生した。童謡の「はらぺこあおむし」が聞こえて来るようなユーモラスな表現に頬が緩んだ。

眼前を深く追い続ける目にはゆとりさえ感じられる。ふと沢木欣一の句が浮かんだ。沢木欣一が昭和21年に発表した『塩田』の中の一句

梅雨の土かゝやきて這ふ蛆一つ 沢木欣一

と重なる。「人間の自分も蛆の一つ」だと評者は言う。美しさを感じる詩心の大切さを感じる。さてこの青虫、どんな蝶になるのかな。

（吉中愛子）

毎月25日発売
定価1000円(税込)

俳句界

2024年9月号

特集

世界の「芭蕉」を追う！

○芭蕉はなぜ世界で一番有名な日本人なのか

堀田季何

○芭蕉HAIKUは何が魅力だったのか

マブソン青眼

○芭蕉の句セレクトジョンとエッセイ

ラーシユ・ヴァリエ

○西洋詩から見た、芭蕉句の新しさ

奥坂まや

グラビア 俳句界NOW 長浜 勤

特集 私が愛する「一品」

稲畑廣太郎 福神規子 確井真希女

中原道夫

小島健

遠藤由樹子

福永法弘

細谷咲々

辻村麻乃

藤原暢子

●山本健吉評論賞奨励賞受賞者の新作評論！

やまだようこ 「俳句におけるメタファーと詩的現実―芭蕉の句をもとに」

工藤義夫 『眩惑』

鈴木久美子 『雪降つて降つて』

★セレクション結社「雲の峰」朝妻力

私の一品 羽村美和子 「ベガサス」

「俳句界」投稿欄

一流選者11名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

俳句

9月号
予告

8月24日発売

巻頭作品50句

西村和子

作品21句

寺井谷子・岸本尚毅

哀悼

鷹羽狩行

追悼文 宇多喜代子・大串章

論考・鷹羽狩行の功績

隠れた狩行の一句／狩行の名句

追悼作品10句／略年譜

追悼鼎談

片山由美子×

宮坂静生×仁平 勝

虚子の遺産／近代俳人列伝

小林秀雄の眼と俳句／俳句の水脈・血脈

蛇笏賞の歴史

好評連載

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>



故郷の橋

札幌 中鉢弘一

橋は橋渡しとも言われるように、地と地、人と人を結ぶ懸け橋として人人の生涯の思いが凝縮されている。

私のふるさと「津別」は網走川の源に位置し橋の数は130余と多い。

北海道には道外からの入植による開拓地が多く存在するが、津別にも開拓の地と、その名残を留めた橋が幾つかあり、秋田県人の開拓した相生という集落と秋田橋もその一つである。

かつては鉄道も敷かれ活気に溢れたこの集落も過疎化が進み「限界集落」の危機にあり、人人の賑わいを見ることはできない。

橋は町の歴史とともにその地の変遷を見て来ているが、いつの日か満天の

星と豊かな自然を求めて訪れる人人の往来を願う「橋」の思いが伝わってくるようである。

若戸大橋

東京 岡村純子

橋と言えば、1962年当時東洋一と言われた赤い吊り橋が目につく。海の上に福岡の若松区と戸畑区を結ぶ長さ627mの若戸大橋である。洞海湾を跨ぐ長さ東洋一の懸け橋は、その後の吊り橋の先駆けとなり、令和4年に国の重要文化財に指定された。

当時、海の上に大きな橋を架けることは困難とされており、日本の技術力の高さを示すものであり、それを成し遂げた技術者達たちの誇りであったことだろう。

対岸まで船で渡るより速く、車や徒歩で直接渡れる便利さが話題になった。海の上を歩けるという開通祝賀の日、両親とともにその列に加わった。

今日では更に技術が進み、各地に架けられるようになった吊り橋である。今は亡き両親を訪れてみたい、そんな心の赤い吊り橋である。

橋

大阪 入山繁幸

橋は両側を渡すもの。箸や箸は食物や餌を体内へ運ぶもの。「ハシ」とは二つのものの間を渡すという概念。

大阪住吉大社の太鼓橋は最大傾斜角48度で人が渡るのは至難の業。古代の出雲大社には極めて高く長い橋が架かっていて高さ16丈(48m)もあったという。これも人が容易に利用できるものではなく神のためのものか。

橋の「喬」は、樓の意「高」の屋根に神の降臨のための依り代の象形「天」を付けた神威に関わる象形文字で神と人との関わりを示す文字。神と人との間を渡すのが橋だとすると、住吉や出雲大社の橋の特異な造形も納得できる。

古代この言葉を中国から移入しその意味を十分に理解し、やまとことばに移し替えた我我の祖先の卓越した知恵と英知には今更ながら感心する。

二重橋

佐野 売野 緑

70年程前、八重洲口の会社に勤めていた姉に連れられて、皇居前広場に行きました。そこはただ広くて、ここに天皇陛下がいらっしやるのよ、と教えられました。奥まった所の石積みのアーチ橋や橋塔に荘厳さを感じました。そして青い芝生に座り、生まれて初めてサンドイッチを食べたのです。その美味しかったこと。今でも再現できない味です。

その後は友人たちと皇居を一周をしたり、靖国神社や武道館に行く時も必ず二重橋に寄り、あの景観を見ることがとても好きです。

10数年前、春の褒章授章の榮譽に浴することになり、バスで二重橋を通り坂下門より皇居に入り、天皇陛下の拝謁を受けました。二重橋は私にとって特別な橋です。もう一度訪れてみたいと思っております。

鉄橋とわたし

静岡 飯田優子

龍が暴れると言われた川袖で、鉄橋を渡る電車の音を聞きながら、私は育ちました。

真夜中にも鉄橋の奏でるリズムは、貨物列車の通過を知らせてくれます。周囲が寝静まる中、こうして誰かのために働いてくれている人がいるのだと思うと、一人机に向かっていている時でも、私は心強く、また元氣付けられたものでした。あれから30有余年、通勤の新幹線での川に差し掛かる時、一つ川上にあるその鉄橋を、車窓から自然と目で見ていることに気がきます。そして懐かしさと寂しさ、感謝など、その時時の「わたし」に出会います。

川を渡る風を受けながら、今日も鉄橋は、人人の暮しを繋いでいてくれます。有難うね。

金門橋

横浜 小坂橋泰山

人生で最も印象に残る「橋」と言えば、新婚旅行で訪れた米国サンフラン

シスコの金門橋である。1930年代に作られた長さ27キロの吊り橋で、青い空と青い海に赤い吊り橋は絵になる景であった。景色とセットでクラム・チャウダーやフィッシュ・マンズ・ウィフの蟹・海老の海鮮料理を想い出す。西海岸で、ルイジアナのジャンバラヤを食したことも忘れない。

ホテルは金門橋に近い、サンフランシスコ湾を望む高台にあった。私は当時化学メーカーの国際部門に勤務していたが、都合で東京の結婚式に出席できなかった米国子会社のトップからお祝いのカードと素敵な花束が届けられていた。その粋な計らいに、家内とともにいたく感激したことを記憶している。42年前の佳き思い出である。

「万象ノオト」投稿募集

▽1月号「 亀 」(9月末日締切)

▽2月号「図書館」(10月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

北から南から

さつぽろ文庫「札幌歳時記」

札幌 瀧谷和代

私が生まれ育った札幌は、開拓使主席判官・島義勇しまよむたけが明治2年札幌本府建設に着手して以来150年あまりで驚異的な発展をとげた政令指定都市である。

札幌市では、札幌の風土の中で生まれた生活と文化を語り継ぎ、後世に残す為の叢書「さつぽろ文庫」を昭和52年から平成14年年まで発行してきた。現在では絶版となっているが、職場の図書室で29巻「札幌歳時記」を手にとることができた。当時の板垣武四市長が序文を寄せている。

「日本人は、四季の変化に敏感で、その折々の微妙な現象や習俗などを短歌や俳句に詠み込んできた。歳時記は、日本人の季節感の集大成であり、美的感覚と言語表現との象徴的な接点である。しかし、本州方面の季節感が中心で、歴史の浅い北海道では内容にずれを感じ、馴染めない事が多い。南北に長く、日本海側と太平洋側では風土もかなり違う日本。

その土地土地に固有の季節感があり、固有の季節が生まれても不思議ではないはず。『札幌歳時記』を読み、正に札幌ならではの気候や風土に結び付いた独特の言い回しや事柄が多く、改めて札幌の季節の味わい深さに感動し、より一層札幌への愛着を強くした。これらの季節には、日々の暮らしの中で季節のリズムをいとおしみ、生きてきた先人の姿をも想像

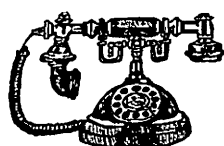
する事が出来る。季節は、言わば自然の財産であり、自然と人間の係りの貴重な証、風土への愛情の証であると思う。」

「札幌歳時記」には、今日と変わらない景色や歴史を重ねてきた文化、生活など北海道の独特な風土を詠んだ短歌や俳句が600あまり掲載されている。俳句の基本でもある写生句が半世紀前の札幌の原風景を蘇らせてくれた。

札幌句会は、松原智津子・岡本敬子両先生のご指導のもと四半世紀以上の間、日々研鑽し、常に季節と季節のずれに悩みながらも自然を最大の武器として俳句を詠み続けている。「万象」は、北海道から沖縄まで、それぞれの土地の歴史、文化、自然を共有できる。北海道で俳句を学んでいる私達が北海道の素晴らしさや北海道ならではの季節を全国に発信していかなければと「札幌歳時記」を読んで改めて思った。

スコップで墓を掘り出す彼岸かな	松原智津子
吹雪く夜は藪のごとくに寝ぬるかな	岡本敬子
屯田の意地ぞと爺の頬被	佐藤 哲
落葉松の秋のひかりを鏤めし	林 陽子
寒明けて一氣に積る雪の高	落合裕子
寒風に街の灯白くなりにつけり	瀧谷和代

万象作品



江見悦子・内海良太共選

○は佳句に選ばれました。

○目つむれる小屋の神鶏薄暑かな 燕 渡辺志ま

村人の沢を守るや螢飛ぶ

伊弥比古の水のめぐる花あやめ

川蜻蛉樹下を現れ樹下に消ゆ

待ち合す始発駅前アマリリス 那珂川 高山ひさ子

○総会の資料整ひ夏料理

挽ぎ立ての胡瓜厚めにサンドイッチ

逢へばすぐ摘んでくれたり桑苺

○新緑の荒行堂に疊の香 東京 一由久美子

蔓薔薇の奥よりチェロの低き音

芍薬の蕊より花粉こぼれをり

鶏の巢に孵化を待ちある緑の夜

平らかな海に鳥居や島若葉 焼津 小梁洋子

玫瑰の径行き行きて蟹の墓

早苗田の雲を蹴散す鷺一羽

○バブル期の戦士でありし父の日来

幾万の蒲公英の絮夕日の中 札幌 谷 廣司

白牡丹の淡き黄の蕊灯の如し

夕暮の夏三日月の白さかな

○朝焼や牧草の波丘を越え

沈みしも立つやサーファー富士暮るる

茅ヶ崎

久保田富士子

直走るトライアスロン若葉風

音もなく揺るるばかりや小判草

○茄子植うる今朝の大山雨もよひ

小次郎の生誕地とや夏つばめ

敦賀

為永香月枝

晩学の道遠くして青嵐

○道の辺の草も血止めや薬の日

夏場所や角番力士勝名乗り

山鳩の蝦夷春蟬と競演す

札幌

石田

陸

昼下り宙を子蜘蛛の目の前に

滑らかに鴨行く向う花菖蒲

青鷺の早き流れにたちろがず

佐々木

茂

○田植待つ田水大雪山浮べ

植物園繁り深山にある如く

春愁や目鼻薄れし無縁仏

島崎

洋

初燕廃線駅舎の軒裏へ

囀にリズムを刻む熊の鈴

○梅雨寒や母の箸まだ箸立てに

万緑や野外ステージ鳴動し

島崎

洋

白南風や牛車で海を渡る島

薫風や水面に光る鳥の水脈

札幌

園田鶴子

○リラの香を葉としたり本閉づる

木隠れに山芍薬はひっそりと

滝音の近づく石の太鼓橋

竹重富子

蝦夷透百合灯台を仰ぎ見る

夏野原木道くぐる野駒かな

花びらを集め牡丹の墓標とす

田邊政代

樹間より空の真青や滝白き

もう散るかしばらく咲けよ沙羅の花

新緑の庭に洗車も又楽し

土門一平

晴れた日の頭にほとり毛虫落つ

柔かな汗拭母に手渡され

土門

一

リラ冷えや号砲に兎ら走り出す

満開のつつじの下に猫の墓

蝦夷梅雨の近づく気配朝まだき

船橋明美

ラベンダーの香りにひかれ遠まはり

店先の青梅の籠母想ふ

練り踊るヨサコイ祭り夏来る

○異国めくビルの灯影やりラの雨

和島良一

日を惜むかに夕暮の遠郭公

○透き通る蓐や喉を滑りたる

新庄

曾野部礼子

底知れぬ水面操る蓐舟

みちのくの田畑潤ふ青水無月

おだまきの四五本摘みてテーブルに

大江

安藤桂花

○畳の間綺麗に掃かれ夏兆す

公園の水場混み合ふ子供の日

照り返す光眩しき植田かな

安藤桂花

初夏や大きな音立て洗濯機

紫陽花や軒数減りし回覧板

ハンカチの花ひらひらと縄電車

仙台

富田洋子

○高らかに聴くカンパネラ聖五月

フジコヘミング返く

富田洋子

バス停の椅子緑蔭に寄せてあり

○時の日や螺子巻く父の腕時計

新潟

榊原キヨ子

明易し出船の銅鑼の響きけり

花時計いつも十時や青葉風

房のまま盛りを過ぎぬ八重桜

佐藤幸示

送別の花束に入るあらせいとう

ぼうたんの百態百の影持てる

青時雨句帳の文字のにじみたり

山田季聰

○退職の未練ひとひら夏落葉

夏シャツの糊心地良く出勤す

田の中に白鷺二三頸を出す

芳賀

稲川清子

集落の草刈り終へて塵拾ふ

単帯しめて踊の稽古かな

若葉風文字のうすれし千社札

福武幸子

○蔓ばらをなだめフェンスに絡せり

旅ゆけば見渡すかぎり植田かな

鳥群れて一斉に食むさくらんぼ

鹿沼

渡辺利子

芍薬の在り処はここぞ真つ赤な芽

草餅の指あと恋し妣の味

紫陽花の彩なき蕾心字池

栃木

飯塚キミ

河川敷すれすれに行く燕の子

抜きたれば腕の太さの夏大根

リハビリに解るる痛み弟切草

佐野

木村君子

初夏の風病院食を完食す

冷房や装具を肩に入眠す

下校子や麦秋の道楽しげに

齋藤ミチ子

風鈴をくぐりて見上ぐ弁天堂

反り橋の下に泳げる梅雨の鯉

しろがねの水辺片葉の蘆茂る 佐野 仲山さよ子

飛魚の雫きらきら朝の海

裏鬼門の屋敷に枇杷の実の青し

チエロ背負ふホームの少女夏つばめ

閉されし店の蔓薔薇さかんなり

赤松の枝へひたすら鉄線花

吟子像の肩に青条揚羽かな

○休みては蟻の引き摺る虻の翅

せせらぎやかつら若葉の日に透きて

メーデーや横断幕も歌もなく 志木 汐見克彦

夏の夜やビルに赤色航空灯

驟雨分け待ち人来り時計台

飲み掛けのワイングラスや明易き

五月雨やスマホで聞す愛唱歌

窓を開け薄暑の朝の深呼吸吸

柏餅好みの餡を迷ひけり 和光 板垣陽子

存分に亡き猫撫づる春の夢

色違へ今年も咲けり花水木

盛り上る初雁城の七変化 新座 多田英治

神宮の森の奥なる花菖蒲

○軒一杯十葉吊し香に酔ひぬ

○無愛想な親爺押し出す恋ポート 千葉 高田みや子

老鶯の声澄み渡る雨あがり

青梅や荒行堂の石畳

竹林の薄日に枇杷の実の青む 酒々井 小林あけみ

浜風や砂地を擦れる夏雲雀

昼顔や鋤簾干したる浜の茶屋

草世界に暫し侵入草を引く 佐倉 新谷八郎

花減し何を告ぐるや山法師

この宿の庭の蹲踞河鹿笛

万緑やモノノケ姫の匂香か においが 有泉正夫

父の日やモンブラン買ふ鳩居堂

○草笛や英治の歌碑は草の中

笛をもらひ灰汁抜く鍋三つ 杉田富美代

次次に春田水張り空映す

五重塔五月の空に聳え立つ

仁王門くぐりて疊む夏帽子 鈴木隆久

○観覧車風に新緑汲み上ぐる

湾またぐ虹に消えたる油槽船

握り飯ほほばる頬に風涼し 鈴木美根子

登り来て老鶯の声澄み渡る

病院の裏の十葉広ごりぬ

初夏や上野の森の大道芸

きいちごを食めばスニーカー軽やかに

鶯や私の口笛まねて来る

十葉の八重見つけたと声弾む

空豆をカレーの海に浮べたり

窓口はアロハ姿に更衣

声がとぶ少年サッカー夏没日

子の寝入り青柿落つる音のして

女子寮の階段の音青時雨

キャンパスになんぢやもんぢやの花盛り

床上げの窓に眩しき山法師

夕さりのテニスコートや梨の花

大樫勇んでのぼる小蟻かな

竹林の角過ぐるまで夏鶯

あぢさゐの蕾やなべて薄みどり

城跡は歪な石や虞美人草

槻若葉商店街の木のベンチ

夏落葉踳踳の中かさこそと

佐倉

米田敏子

船橋

山口秀吉

柏

鹿毛満子

村田由美子

松戸

石川幸子

菊岡緋路

○戸定邸の硝子の歪み白躑躅

子の意見聞いてなすびの花一つ

廃屋の垣より実梅零れたり

咲き誇るばらの香喪屋を包みけり

今生の今ゆつたりと夏の雲

能登揺るるなほ揺るぎなき牡丹かな

朝の日にきらめく梢立夏かな

伸びやかな子らの挨拶夏来る

午後の日をとどめ枇杷の実たわなる

雨きざす山に空木の花明り

ジャカラランダの風の中なる夏帽子

どくだみを干す母の背のつつがなき

黙黙と皮剥く手際らつきよ漬

気風良き鮎屋の親方青葉窓

○父漬けし平成九年の梅酒かな

白つつじ小雨に濡れて艶をだす

遅咲きの桜並木や光月町

ビルおほふ大藤街の宝物

先頭は草笛を吹く山ガイド

禅寺へ野火止の径えごの花

松戸

寿多映子

中森ひろえ

渡部洋子

市川

奥澤よし江

東京

安藤美酒々

大場八朗

北口富栄

万緑の杜の閑けさ神楽殿

○風鈴や短冊の染みなぞりたる

東京

齊藤孝夫

鴉の巢ハンガー空を編み上ぐる

ベッド走る処置室までを声と汗

青水無月林試の森を駆けぬくる

知らぬ間に肌掛けとばす子の昼寝

短夜や母との会話うつうつと

巡行の列や子ども祭笛

○好みやや派手になりをり更衣

海青し旅の間のアロハシャツ

雨あがり紫陽花の道ゆづり合ひ

バス停や藤房ゆれて雨やどり

竹秋の空気冷し空の青

青蛙待つては呉れぬ横つ跳び

江戸城の天守跡とや風薫る

たかなの煮上る香り二階迄

藤房の揺るれば風のむらさきに

木木のを空の青さや夏近き

新緑の奥に英世の記念館

惣菜屋のメンチ売り切れ薄暑かな

鶴田智美

中澤桃子

橋本紀代子

長谷川信也

馬場美智子

平子甲奈

カリフォルニア立夏の空へホームラン

黄金週間紙の断捨離清清し

夏みかん半分づつや孫と食ぶ

カナダより届く花束カーネーション

ミニトマト初生りひとつつけてをり

五月田に走る白雲風さやぐ

野辺送り郭公の声聞きながら

夏椿の落花集むる小学生

こごみ摘む雪解雪の瀬にかがみ

○負け試合のバットの重し栗の花

麦の秋湖畔を走る黄の列車

車椅子寄する公園花木

夏燕雲ひとつなき空を飛ぶ

昼顔の草にからみて立ち登る

黒南風や社の樹樹の神隠す

河川敷どつと波打つ茅花かな

病癒え薄暑に眩む昼さがり

高野山三鈷の松の落葉かな

朝練の列潜りけり夏燕

○故郷の祭家老の役の父

東京

前川

昇

宮崎正義

調布

荒井

仁

三鷹

南場雅子

府中

竹村晃子

日野

松原悦子

古きジャズ流るる店や春の昼

青梅

横井一美

街静か初夏の祭を反芻す

花の下はみ出す人や花筵

横浜

星野信子

学校の葉桜の下涼やかに

耳たぶを触り寝る児や若葉風

駅ごとに燕すいすいローカル線

横浜

大駒泰子

異国語の飛び交ふカフェや若葉風

走家屋敷土塀の屋根を松葉散る

森 桂子

鮎一尾分け合うて食ぶ解禁日

藤の花トールペイントの筆をとり

山法師小雨にけむる水車小屋

鯉幟母思ひ出すわらべ歌

川崎

横山ユキ子

六月や草木色濃く雨の中

ホールインワン鶯の声しきり

川崎

横山ユキ子

梅雨近し雲間に覗く空の青

万緑の風重たげや地震の村

朝風や根岸湾の面ふくらみぬ

緑蔭の碁会所となるひと日かな

伊勢原

鷹取瑞子

朝食のインドの紅茶新樹光

七変化賑やかなる小さき庭

伊勢原

鷹取瑞子

雨に咲く千代萩の濃紫

曾孫等と囲むランチや濃紫陽花

伊勢原

鷹取瑞子

ドミンゴの終の歌声青葉風

ベゴニアの花を眺めて夫の留守

伊勢原

鷹取瑞子

○母の日に植ゑし紅薔薇大輪に

夏来る朝日へ深く一礼し

伊勢原

山本カツ子

改築の足場払はれ雲の峰

種粃を浸す湧水石仏

伊勢原

山本カツ子

三日はや積荷の灯油届きたる

砂利踏みて梵鐘一打夏来る

伊勢原

山本カツ子

冬草のひとつむらこがね色に映ゆ

かまぼこ通り店それぞれの夏のれん

松田

古谷悠紀子

杜の空追ひつ追はれつ寒鴉

おしやべりの二人時どきさくらんぼ

松田

古谷悠紀子

深更の救急車の音臘月

ジョギングの子等を囃せりほととぎす

松田

古谷悠紀子

花冷えや友待つ駅へ杖を曳く

鬼瓦据ゑて見上ぐる汗の顔

松本

藤森利子

長野高朋

柴田雅春

坂本具子

加藤和子

岡 元枝

大駒泰子

横井一美

孫と娘と笑顔で写る夏休み
残雪や囲炉裏の灰をまきにける

夫と二人炬燵に過す一日かな

松本

藤森利子

里芋を母と掘りし日なつかしき

根白草里の湧井の小流れに

緑蔭や庭師の腰の鉋の揺れ

静岡

飯田優子

草庵の背戸に転る青林檎

梅雨鴉弁財池の澱みたり

卯波浴び蹄深深浜競馬

伊東文恵

灯台の丸窓ふたつ花櫓

こどもの日袋小路のボール蹴り

牧ノ原家族総出の茶摘時

海野俊彦

○葉桜や展示の替る美術館

春荒やまさに離陸の救助隊

心経の漏れ来る谷や若楓

杉田義則

○雲の峰スコアボードの手書き文字

異国語の朱印求むる春の昼

城濠に夏の三日月映りたり

高井明子

腹当や祖父と揃ひの金太郎

白壁に漣映る走り梅雨

石垣の古りし棚田を耕せり
やぶきたの原樹若葉のきらめける

静岡

高橋一夫

木苺へ手を伸しけり獣道

囀を浴びに浴びたる峠道

田中秀幸

春筍を焚く香四方に流れたる

朝市やトマトの艶の日を返す

筍や嵯峨野の土の零れたる

内藤允昭

○壬生寺の柱の疵や昭和の日

花水木下校の子らの二部合唱

雲間より頂のぞく雪解富士

永田公香

潮騒を聞きて鰯割く厨かな

歛を持つ尊徳像や柿若葉

老鶯や観音像は御簾の中

長谷川洋子

若楓弁財天に影差せり

青空へ風蘭香る城の庭

薫風やごろりころ路地の猫

松永博子

まくなぎに追はれ飛び石渡りけり

夏燕天守背に空を切る

札の辻石碑にのぼる天道虫

矢野喜久江

城垣の上に草刈る四人かな

街道を蟻の門渡り続きをり

乱鶯の声の中なる尊徳像

掛川

鈴木美由紀

滝のごと定家葛の花こぼる

トマト売りの揃ひのベレー真赤かな

五月来るプラスバンドの響きかな

川崎

鈴木裕一

青蜥蜴光るや逃げても隠れても

指先の一芯見つむる茶摘かな

武具飾る旧街道の漬物屋

珠洲

井端久子

○避難所に小さな小さな鯉のぼり

店先の亀を突く子笹粽

故郷の樵山まさに万緑へ

白山

鶴尾正江

獲物待つ円錐形の蟻地獄

父の日や臉にうかぶ丸き背

風五月復興ピアノに思ひ乗せ

朝倉みゆき

絹紅梅衣桁に掛けて夏座敷

窓ガラスに迫る柄長の急停止

土筆摘むをみなエプロン一杯に

かほく

能任康子

花束のミモザや国際女性デー

花筏雨に次次押され行く

長屋門の武者窓ぬくる青葉風

金沢

宮崎恵美

水たまりぴちやびちやと夏帽子

長屋門の厩のあとや白牡丹

無造作に熊の箱毘木下闇

金沢

松田好子

隅棟に置きある布袋青葉風

凋落の家のたぶのき若葉照る

○雪形は猿たばこてふ田水張る

廣田宏美

生え揃ふ小判草まだ薄緑

藤の花枝張る木木の隙に散る

砂丘ゆく馬と出合へる薄暑かな

田上ナツ子

老鶯や大樹を包み鳴き交す

旧庄屋上がり框に緑さす

○雲の峰高校相撲に地震忘る

新出祐子

友くるるアカシアの花天麩羅に

鳥の声樹下の野蚕やさんのうすみどり

草刈の若者たちや千枚田

北野陽子

輪島の空泳ぐ幟を見上げたり

燕来て空き家の中に住ひけり

花万朶山へ里へとくり出せり

上野富貴子

カフェテラスの換気口より雀の子

蜜吸ひし遠き日のあり花躑躅

角帯にさしたる扇子青海波

敦賀

川口和代

翠黛の戸隠山や夏兆す

粽結ふ一族喜喜と夕餉の灯

若葉寺ばつくり地藏の癒し顔

徳島

林 早苗

木魚打つリズムや僧の薄ごろも

リオサンバてふ大輪の紅の薔薇

帚草これほど風にすなほとは

山本晴美

万緑の中や句友の大往生

風薫るレモングラスのハーブティー

家中の窓開け放つ聖五月

山本瑤子

もう聴けぬフジコのピアノ昭和の日

夕闇の迫るふる里枇杷熟るる

波の消す小さき靴あと聖五月

小松島

田上幸子

出航の汽笛は三度夏兆す

薫風や稚児行列の辻曲る

おだやかな湾きりかへす夏燕

松山

入河 大

枝先の揺るるに合せ夏の蝶

母の日や母の着物のそのままに

○五月雨や骨壺十個の墓仕舞

福岡

園田清子

どこ迄も蚕豆畑空青し

水無月の西大谷や読経の声

酢味噌和へ芹の香を聞く夕餉かな

福岡

鶴田輝代

夕まぐれ加勢の子らと麦を刈る

錆兆す馬のオブジェや新樹蔭

水張つて畦にならぶる早苗箱

宮田千恵子

蔵の扉のずしりと重し走り梅雨

椅子固き港のカフェー半夏雨

練切の籠の巧みや杜若

太宰府

美山留唯

古民家に茶葉煎る香り里若葉

道の駅山鹿新茶を啜りけり

時明り萌黄色益す柿若葉

宮崎

湯地栃子

花笠の過ぎし静寂や賀茂祭

新緑の清^{すがすが}しさや風の中

カーネーション墓前に供へ一周忌

門川町

請関ゆかり

龍神の住ふ噴井の水清し

梅雨晴間潮騒届くわが母校

山山と浮雲映す代田かな

同富

山口孝治

梅雨の夕子等の足跡散りばめて

ペーロンをこぎゆく友の笑みこぼる

○山原路山に雨呼ぶ伊集の花

那覇

大城末治

〈新会員のご紹介〉

6月の新規同人加入者です。

北川 禮子様 金沢市〔風港〕終刊により

6月の新規加入者です。

雁部 真子様 札幌市

高井 明子様 静岡市

杉山 千鶴子様 静岡市

7月の新規加入者です。

野崎 浩子様 静岡市

鶴啼くを聞かむと風の休耕田

睡蓮の揺れて水面を揺しけり

首里坂の風音変る立夏かな 那覇 辺野喜宝来

月桃の花房ゆるみゆく雨後よ

梅雨の窓疊二枚に灯をひとつ

荒梅雨の午後とりあへずカップ麺 高嶺容道

外灯に濡れて散る葉や五月闇

硝子戸に木の葉の揺らぎ梅雨晴間

登校の少女の会釈花福木 宜野湾 宜野 顕

白南風やバナリ素焼きの珊瑚粒

○組踊の稽古涼しき月の庭

余花の雨灯とほしき山里に ベルン 森尾 舞

震災の復興未だ夏に入る

脚本の脱稿待つ夜ビール酌む

お詫びと訂正

8月号本誌掲載の同人作品中に誤りがありました。

謹んでお詫びして訂正いたします。

30ページ上 宮城勉様の作品4句目

(誤) ででむしの米粒ほどの角確と

(正) ででむしの米粒ほどや角確と

「第二十二回万象俳句賞」速報

万象俳句賞 「空の不思議」 伊藤美音子(金沢)

次 点 「茶 摘」 伊東 文恵(静岡)

佳 作 「辺土の桜」 松田 好子(金沢)

佳 作 「鳥」 杉澤 修(静岡)

詳細については10月号に掲載します。

万象俳句会

万象作品の佳句

内海良太

目つむれる小屋の神鶏薄暑かな 燕 渡辺志ま
新潟の渡辺志まさんなので、この小屋の神鶏は越後一宮、
弥彦神社にある「日本鶏舎」での囀目だろう。

神社の鶏が大切にされるのは、天岩戸の神話、常世の長鳴
鶏を集めて鳴かせたのが縁。この神社では新潟県天然記念
種の「蜀鶏」（とうまる）という鶏を大きな鶏舎で保護育成
している。羽、嘴、脚が黒色で体格も堂堂、神の鶏という感
じがする。薄暑の鶏舎前での景。

総会の資料整ひ夏料理 蜀川 高山ひさ子
期末を迎えて各種の企業、団体では総会が開かれる。この
句の総会はそれほど格式張ったものではないらしいが、それ
でもけじめははじめ。担当者が資料をコピー、丁合、ホチキ
スでテキパキ。準備が整ったあとの夏料理は格別。

新緑の荒行堂に畳の香 東京 一由久美子
去る5月11日、「万象」千葉県支部の吟行会が市川市の真
間山弘法寺、中山法華経寺周辺で開かれた。

句は法華経寺の荒行堂。寒百日の間、早朝3時から深夜11
時まで一日7回の水行をし、粥を啜る。この荒行堂、畳はぶ
かぶかですり切れているものと思っていたが、なんと青畳の
香がしたという意外性。

バブル期の戦士でありし父の日来 焼津 小梁洋子
日本のバブル期は昭和61年（1986）〜平成3年（19
91）頃をいう。社会全体が今までにない好景気を実感した
時期だった。この頃の小梁さんの父上は働き盛りだった。今
日は父の日、その頃の面影を残している父上である。

朝焼や牧草の波丘を越え 札幌 谷 廣司
北海道の広大な牧場の朝焼、想像しただけでも清涼しい。
この夏の時期は牧草もよく生長して、牧草が風によく靡き波
を打っているのだろう。その波が「丘を越え」に景色が眼に
浮かぶ。的確な表現である。

茄子植うる今朝の大山雨もよひ 茅ヶ崎 久保田富士子
朝夕、大山の眺めのいい久保田さんの自家菜園。茄子、胡
瓜、トマトなどの夏野菜は殆どこの菜園で賄っている。

この大山は丹沢山塊の東端に位置する1252mの山で、
「あふり山」という別名があり「雨降り」を意味するという。
また阿夫利神社の境内には滝沢伊代次先生の句碑が建ってい
て、「万象」には「縁のある山である」。

道の辺の草も血止めや薬の日 敦賀 為永香月枝
5月5日の「薬の日」に山野に出て採った薬草は特に効き
目があるという。これは中国の風習が伝わったもの。季語に
は（薬狩、百草摘、薬草摘）がある。血止めの薬草にはチド
メグサがあるというが、注意して見ないとなかなか見つけら
れない。為永さんのような薬草に詳しい人と図鑑持参で歩い
てみるのが一番いい。

これより三句入選からの佳句

田植待つ 田水大雪山浮べ 札幌 佐々木 茂

畦で細かく区切られた本州の水田を見慣れている目には、水田に大雪山が映る景は、想像しただけでも圧倒される。このあと、田植機が入って効率よく早苗田が広がって行く。田植の新しい風景である。

リラの香を葉としたり本閉づる 札幌 園田 鶴子

歳時記に「ライラック」。寒地でよく育ち、ことに北海道札幌が知られているとある。傍題にリラの花、紫丁香花と載る。「リラの香の葉」とは札幌の人ならではこと。洒落たことをなさる人だと思った。

休みては蟻の引き摺る 虹の翅 佐野 義本美智江

蟻自身より大きい虹の翅だろう。具象的で写生の描写が行き届き情景が手に取るように分かる。即物具象を自得しつつあるこれからがますます楽しみですな作者と見た。

草笛や英治の歌碑は草の中 佐倉 有泉正夫

国民文学作家・吉川英治の歌碑が佐倉市の印旛沼のほとりに建つ。吉川英治の母上が印旛沼を見渡せる白井町江原の出身で英治はたびたび立ち寄っている。歌碑には「萱屋は母の胸にも似たるかな高きをわすれただぬくもれり」。草笛のよく似合う環境である。

観覧車風に新緑汲み上ぐる 佐倉 鈴木 隆久

行楽のシーズン、観覧車は人気でどこも混んでいる。逆に観覧車を遠くから見ていると、水車が水を汲んでいるように

も見える。時節柄、新緑を汲み上げるとは言い得て妙。

好みやや派手になりをり更衣 東京 中澤 桃子

今年も更衣の季節がやって来た。毎年の更衣だが、ふと気付くと、これまで年齢相応に合わせていたより、自分の好みを表現するようになっていっていると気付く。お若い証拠でいい。

故郷の祭家老の役の父 日野 松原 悦子

城下町の夏祭、時代装束での行列があったのだろう。行列の中心にいる袴姿の父は家老役、恰幅のいい父は家老によく似合っていて、思わず「お父さん」と声を掛けなくなる。明るくて一緒に嬉しくなってくる句。

壬生寺の柱の疵や昭和の日 静岡 内藤 允昭

この壬生寺は壬生狂言で有名な京都の寺だろうか。柱の疵など謎解きが必要になってきて鑑賞が大変。牽強付会すれば、幕末の壬生寺は新撰組の屯所だった。境内では毎日剣術の訓練があり、柱の疵は刀疵だろう。

かつて4月29日は昭和天皇の「天皇誕生日」の季語があった。その後「みどりの日」から平成元年に「昭和の日」に変わり、季語として使われている。

組踊の稽古涼しき月の庭 那覇 宜野 顕

組踊は沖縄の伝統的な歌舞劇。セリフは沖縄の古語で、沖縄の音楽や舞踊で構成される。

私の沖縄勤務時代、同僚の首里のお宅の涼しい庭に招かれ、句のような体験をしたことがある。この時も稽古らしかったが沖縄の古典芸能を心ゆくまで楽しめた。

富士山山開き吟行

神田美穂子



7月10日江見主宰はじめ関東圏から9名、静岡より13名が参加し、富士山山開き吟行が行われた。9時半東海道新幹線新富士駅で主宰他9名をお迎えし、静岡からのマイクロバスと合流して吟行が始まった。バスは富士市内から富士宮市内を抜け、うっすらと見える富士山を車窓に目的地へ向かった。まず初めに、境内には本殿が無く、富士山そのものを神として拝むための遥拝所のある山宮浅間神社へ行く。階段を上

り詰めると真正面に富士山が見える。鶯の声や蟬の声を聞きながら、曇りがちな空に薄薄とした大きな富士を拝んだ。次に山開きの神事の行われる村山浅間神社へ。村山浅間神社は、明治時代の初めまで京都の聖護院を本寺とする修験道の拠点で、「富士山興法寺」と称し、富士修験の中心地であった。境内にはすでに

多くの人で埋まり、禊の神事が始まる所であった。まずは京都の聖護院の山伏による禊、それに続き地元の中学生による禊が行われた。見物人の中にも般若心経を唱和する人もいて、その声が響き渡った。

境内にある興法寺の本堂にお参りし、展示されている役行者をはじめとした仏像と、富士山曼荼羅図を拝見した。

その後、村山古道入り口で山伏による、富士山入山式と山開き式が行われた。山伏の「エイ」と言う掛け声に石畳の古道の両脇の杉に渡した注連縄を一刀のもとに両断した後、法螺貝が響き渡る中、山伏が古道に入り、我々一般の人にもそれに続いた。古道の石畳は杉落葉に覆われ、大きな蚯蚓があらちちから出てきた。

最後に四方に注連縄を張り巡らせ結界を作った護摩壇に移り、山伏問答が行われたが、今年は地元の中学生在が山伏に代わって行った。少少たどたどしい山伏問答であったが、中学生の真剣な声が境内に響いた。その後、山伏により六本の矢が、四方と最後の一本は鬼門に放たれた。その後護摩壇に堆く積まれた檜葉に火が入り、法螺貝が富士の麓の森に響き渡った。

12時45分バスに戻り、時間の都合によりめいめいに持参の昼食をバスの中で食べ、句会場へ向かった。到着後全員で句会場を整え、一人5句投句で句会を行なった。天候にも恵まれ参加者一同に山開きの吟行を楽しんでいた。

江見悦子主宰 特選

少年の山伏問答風涼し 久留島規子

曾根 満 同人会会長 特選

六の矢は鬼門に放ち山開き 神田美穂子

榎本文代 特選

ひと振りの太刀で注連断つ開山祭 一由久美子

吉中愛子 特選

山開き村山口に蚯蚓出て 古川京子

神田美穂子 特選

山開き雲山頂を乗つ取りぬ 伊東文恵



座談会 最近の名句集を探る

坪内稔典『リスボンの窓』 筑紫磐井 司会

亀井雉子男『朝顔の紺』 浅川芳直

守屋明俊『旅鰻』 大西 朋

●巻頭三句

岸本尚毅 大元祐子／田島和生

秋尾 敏 田中亚美／奥田亡羊

福神規子 亀井雉子男

二ノ宮一雄 『塩野谷仁俳句集成』

碓井真希女

七夕まつりレポート

●好評連載

成瀬政博 井上泰至

とりあえずの日々 イメージ辞典

筑紫磐井 神作研一

俳壇観測 てのひらの江戸

坂口昌弘 藤村公洋

忘れ得ぬ俳人と秀句 俳句のつまみ

青木亮人 堀田季何

句の手触り、俳人の響き 諸家書架

大西 朋 二ノ宮一雄

俳句四季
Haiku Shiki

2024年9月号

8月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

新中央句会報（6月例会）

令和6年6月24日（月）本郷男女平等センター

（出席19名）

江見 悦子 主宰選

梅雨冷の待合室に知つた顔 桑原優美子
炭団坂たよりの手摺灼けてゐし 吉中愛子
舟を曳く舟を一閃夏つばめ 下嶽孝一
友送る駅舎にかかる虹の橋 南雲秀子
基地ありて何の沖繩慰霊の日 砂地宏子
ぬか床に探し当てたるめうがの子 小池清晴
亡き人の掲載続く梅雨晴間 小池清晴
青鷺の歩める水を動かさず 吉中愛子
藪蚊打ち打ち一葉の井戸探す 島野ひさ
青梅を青く煮つめて日の暮るる 榎本文代
小さきシャツばかり干さるる梅雨晴間 島野ひさ
無縁墓の罅とはならず青蜥蜴 砂地宏子
④ 棒色の僧の衣や南風の街 中村千久

⑤ 棒色の僧の衣や南風の街 中村千久

一読、「棒色の僧の衣」に惹かれた。棒色は、蒲の穂の色、赤みをおびた黄色、と「広辞苑」にある。「南風の街」から、東南アジア、例えばタイの仏教徒の僧衣を思い浮かべた。季語である「南風」は、「はえ」と読む南風。五、六月に吹く

「黒南風」は雨を伴い、梅雨明けの頃吹くのが「白南風」である。ここでは白南風と取りたい。何人もの僧侶が通りを行き交っているのだらう。「棒色の僧の衣」という具体的なモノを掴み、的確な季語を取り合せた異国情緒豊かな句。

梅雨冷の待合室に知つた顔 桑原優美子

混みあつた病院の待合室だらうか、知つた顔をみつめた。さほど親しくはなく、出会つた時に黙礼を交わす程度の間柄の人物である。声を掛けるまでもないが、何となく気になる。そんな微妙な気持ちに句にした。梅雨冷という季語が生きた。友送る駅舎にかかる虹の橋 南雲秀子
久しぶりに会つた友を見送る駅舎の上に、虹の橋が出た。友とたつぷりと旧交を温めたあとの満ち足りた思いに通う、美しい虹の橋、明るい別れとなつた。すつきりとした気持ちの良い句。

内海 良太 名譽主宰選

水無月や奇岩に赤き納経堂 一由久美子
み吉野の和漢薬舗や桜の実 砂地宏子
海風きてをり山盛りの穴子井 榎本文代
舟を曳く舟を一閃夏つばめ 下嶽孝一
梅雨湿り鉄の匂ひの外階段 桑原優美子
桜桃忌栗となりし虫めがね 奥 太雅
夏安居や古き樺戸閉づる音 一由久美子
磨崖仏のあはき輪郭鴨足草 一由久美子
飛行場跡地を覆ふ夏薊 松井宣夫

藪蚊打ち打ち一葉の井戸探す 島野 ひさ
僧涼し天岩戸を対岸に 江見悦子

④ 全身で咲いてゐるなりアカンサス 桑原優美子
⑤ 青柿や跡かたも無き常盤会 吉中愛子

⑥ 全身で咲いてゐるなりアカンサス 桑原優美子
アカンサスの花はギリシャの国花という。長い茎に淡紫色の唇形の花が次次に30個ほど咲き登り、全身で一生懸命咲いている。桑原さんはその健気さに感動したのでだろう。

アカンサスは古代ギリシャ・ローマの柱頭文様で知られている。これは花ではなく、文様はギザギザの切れ込みが入った大きな葉の部分。近代の家具にも文様として多く使われている。

⑦ 青柿や跡かたも無き常盤会 吉中愛子

6月の新中央句会は文京区本郷で開かれた。会場近くの菊坂周辺には樋口一葉や坪内逍遙の旧居跡があり、また若き正岡子規や河東碧梧桐が寄宿していた旧伊予藩の寄宿舎「常盤会」跡も近くにあった。句会の有志は午前中に吟行して、多くの収穫があったようだ。

故郷が松山の吉中さんは「常盤会」跡を訪ねたが、庭木の青柿が生るばかりだった。

み吉野の和漢薬舗や桜の実 砂地宏子
吉野は生薬の宝庫といわれるくらい山野には薬草が多く、役行者が教えたという強壮アマチャズル、胃腸薬陀羅尼助の黄蘗の原料もここ吉野から。町には大きな金看板を掲げ、そ

れらを商う薬舗が数軒ある。桜の実を敷きつめた町筋の薬舗も吉野の一つの景色である。

中村 千久 選

み吉野の和漢薬舗や桜の実 砂地宏子
海風ぎてをり山盛りの穴子井 榎本文代
二塁手の少女トンネル夏の雲 三屋英俊
基地ありて何の沖繩慰霊の日 砂地宏子
織部忌の座に安南の歪み碗 三屋英俊
夏安居や古き樺戸閉づる音 一由久美子
ぬか床に探し当てたるめうがの子 小池清晴
サングラス見知らぬ人になりたくて 桑原優美子
花束は白一色や六月来 砂地宏子
飛行場跡地を覆ふ夏薊 松井宣夫
小さきシャツばかり干さるる梅雨晴間 島野ひさ
夏草や住み継ぐ人の見当らず 下嶽孝一
⑧ 岩戸神楽果て老杉に夏の月 江見悦子

⑨ 岩戸神楽果て老杉に夏の月 江見悦子
「岩戸神楽」は天照大神の天の岩戸隠れの神話を題材にした里神楽。宮崎県高千穂を訪れた作者はそんなひと時を楽しんだようだ。句またがりの掲句の後段「老杉に夏の月」がなんと見事だ。あたりの情景をしみじみと味わいたい一句である。

二 墨手の少女 トンネル夏の雲 三 屋英俊

「織部忌」の句を詠む手練れの作者の句であることに驚いた。この明るさ、この若しさはなんだろう。草野球では二塁手は余りもののようなポジション。そこを守ることになつた少女は緊張もしたことだろう。見事にトンネルをしてしまったのだが、作者が少女を励ましていることを、季語が伝えている。

花束は白一色や六月来 砂地宏子

百合やカラーなど、六月の花には白いものが多いと常感じていた。そんなときに目にした掲句に手を打った。この花束は、作者が求めたものなのか、或いはたまたま目にしたものなのかは語られていない。しかし「六月来」と言われると、どこかで「ジューン・ブライド」という言葉が寄り添って来た。「白一色」は、花束だけではなかったかもしれない。

榎本 文代 選

七夕の一字ごとの重さかな 松浦陵保
 岩戸神楽果て老杉に夏の月 江見悦子
 雲厚き今日は紫陽花日和かな 中村千久
 阿蘇五岳のけぶれる青田水田かな 江見悦子
 梅雨湿り鉄の匂ひの外階段 桑原優美子
 ぬか床に探し当てたるめうがの子 小池清晴
 庭の梅煮たると届く瓶五つ 桔梗 純
 花束は白一色や六月来 砂地宏子
 蚊打打ち打ち一葉の井戸探す 島野ひさ

小さきシャツばかり干さるる梅雨晴間 島野ひさ

僧涼し天岩戸を対岸に 江見悦子

遣り過す背に梔子の香りけり 久留島規子

④ 夏草や住み継ぐ人の見当たらず 下嶽孝一

⑤ 夏草や住み継ぐ人の見当らず 下嶽孝一

住宅街でも空き家を見かけることが多くなった。守り、そして引き継がれてゆくはずだった家が今は夏草に覆われ荒廃した景を曝している。「継ぐ人」の一言が巧みで、現代がいろいろと実感させられる句。下五は「見当らぬ」が正しいと、主宰の選評があった。

ぬか床に探し当てたるめうがの子 小池清晴

茗荷の糠漬けとはおいしそうである。小さいので糠床をかきましてもなかなか見つからなかったようだ。「探し当てたる」が、宝物でも出て来たようで面白い。

雲厚き今日は紫陽花日和かな 中村千久

紫陽花は雨がよく似合う。雨に濡れて色を深めてゆく美しさがある。今にも降り出しそうな空模様を「紫陽花日和」ととらえた感覚がいい。雨の少なかつた六月なればこそと思う。

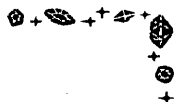
今後の新中央句会の予定

▽9月22日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

▽10月の新中央句会は中止とします。



ルビーの小函 (9月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 7 歩荷 (ほっか) | 26 山桜桃 (ゆすらうめ) |
| 9 礎 (いしじ) | 27 鞆札 (せりふだ) |
| 13 鏝むる (ちりばむる) | 黙 (もだ) |
| 海霧 (じり) | 緋く (ひもとく) |
| 14 縮 (ちぢみ) | 祓場 (みそぎば) |
| 細濁り (ささにごり) | 29 葉研研く (やげん・ひく) |
| 15 鶴 (こう) | 傾城 (けいせい) |
| 殿 (しんがり) | 蠅虎 (はえとりぐも) |
| 梅雨入 (ついり) | 30 窟 (いわや) |
| 真つ向 (まっこう) | 31 唐箕 (とうみ) |
| 雉子 (きぎす) | 夏暁 (なつあけ) |
| 勢 (きおい) | 33 嬰児 (みどりご) |
| 16 仕舞屋 (しもたや) | 38 冠木門 (かぶきもん) |
| 柵の花 (ずみのはな) | 50 直走る (ひたはしる) |
| 17 山毛櫟 (ふな) | 蝦夷透百合 (えぞすかしゆり) |
| 18 梢 (ぬれ) | 51 尊 (ぬなわ) |
| 19 四阿 (あずまや) | 弟切草 (おとぎりそう) |
| 20 手甲 (てっこう) | 52 吟子 (ぎんこ) *女医・荻野吟子 |
| 21 ペンキ塗れ (ぺんきまみれ) | 青条揚羽 (あおすじあげは) |
| 22 階 (きざはし) | 鋤簾 (じょれん) |
| 23 射干 (ひおうぎ) | 54 眩む (くらむ) |
| 毀たれて (こぼたれて) | 58 翠黛 (すいたい) |
| 24 背 (そびら) | 帝草 (ははきぐさ) |
| 25 旋風 (つむじかぜ) | 山原路 (ヤンバルじ) |
| 山祇 (やまがみ) | 伊集の花 (イジュのはな) |
| 歳三 (としぞう) *土方歳三 | |
| 26 鮓 (ごり) | |

* 8月号の本欄、24「葛布」の訓みは「くずふ」でした。訂正致します。

消 息 等

内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句

「くちら」7月号に

牧開き 厩舎の壁の血統図 良太

をちこちの空の爛漫花疲れ 悦子

「初蝶」「たかな」7月号に

雛飾る津軽なまりののんどりと 悦子

「春耕」7月号に主宰の「砂時計」を紹介

雨に來て夏炉の薪の匂ひけり

友の忌や森に生まれし黒揚羽

かなかなの続く森より明けにけり

山に親しむ作者、鬱蒼とした森の情景が、

けりの切れ字によって快く、その空気が伝

わる。(中略)

新主宰となり作者は「個性と新しみのあ

る俳句」を目指すとして述べている。昨日の自

分に安住せず、今日、明日と「個性と新し

みのある俳句」を目指す。作者の、また俳誌

「万象」のこれからも大いに楽しみである。

「俳句」7月号の「合評鼎談」で、名誉主

宰の「花筏」(5月号に掲載)について横

澤放川氏、辻村麻乃氏、抜井諒一氏が鼎談

横澤「万象」の主宰を務められた方です。

伝統俳句とはちよつと違う、「風」以来の

系列の方。伝統的なものもありますが、そ

ういうものが句の中にも見受けられる。

芥浮く弥生も末の小名木川

調べも良くて、小唄が何かになりそう。

あそこは北砂に石田波郷が住んでいまし

しね。

辻村 思わず音読したくなるような調べの

句です。

横澤 その一つ手前に、

雛壇に「貝おほひ」でふ干菓子かな

「貝おほひ」は芭蕉が発句合わせをして処

女出版した本の名。そんな名前のついた干

菓子があると。芭蕉を意識したのかもしれ

ません。(小名木川)は、深川の芭蕉庵があ

った最初の地。弟子の杉風の世話になった。「貝

おほひ」も最初の頃芭蕉の句は、小唄集と

言ってもいいような調べがあった。こんな

ところはなかなか芸が威力を発揮している。

抜井 (雛壇に「貝おほひ」でふ)は、や

はり芭蕉の処女作「貝おほひ」の名前がつ

いた干菓子があることで、ただならぬ雛壇

の様子が伝わってきました。

「芥浮く」も、順番に「貝おほひ」が出

てきているので、杉風や新しいところでは

石田波郷が浮かんできました。

ながながと木場の運河の花筏

表題句ですが、「木場」の固有名詞が効い

ています。当時も花筏が浮かんでいたし、

今も浮かんでいると。(ながなが)とあるこ

とで、時代を超えて花筏が続いていそう。光

が自分にも降り注いでくるような美しい句。

辻村 本当に長々としているので、そのま

ま表現しているところもいいですね。花筏

の長い連なりも見えてきました。余談です

が、実は私「小名木川物語」という映画に

ほんの少し出演しています。句会をやる

役でした。映画では、石田波郷の人生も描

かれています。波郷はよくその辺りを散歩

していたらしいです。花筏の中を舟が行っ

たり来たりして、そこにズームしたりと。

詩人の吉増剛造さんがやるイベントの中の

一つに、映画上映がありました。個人的に

はそんな縁がある場所です。

抜井 手拭も撒いて芸妓の鬼やらい

非常に大人な句。浅草寺でしょうか。次

に雷門の句も出てきます。

客待ちの俤夫に日永の雷門

全体的に大人の仕上がりで、いい8句だ

と思いました。

第22回沖繩忌俳句大会 6月2日開催

(主催) 沖繩県現代俳句協会

沖繩県知事賞

茶を摘める指のしめりも沖繩忌 前田貴美子

県・現代俳句協会会長賞

目つむれば海の重さよ沖繩忌 辺野嘉宝来

(報・編集部)

←この線より切り取ってください

令和七年

万象作品

一月号

(十月十五日締切)

(句の表記は歴史的かなづかいで) (*の枠内には何も書かないでください)

都または市・町・村名	
姓 号	がなり
年齢	

*

*

*

*

*

939-0364

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

10月1日より
110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽歳時記にある「震災記念日」は、1923年9月1日の関東大震災のことだが、あれから100年になる。残念なことに今年の能登半島地震に至るまで、列島は数数の地震禍に見舞われ続けた。地元の自主防災会を与る身としては、今や公助が当てにならないことは明らかなので、自助はもとより、日頃からの近くの人たちとの共助・近助の強化の大切さを痛感する昨今。リズムが必要なのは、俳句だけではありません。御身大切に！（千久）

▽令和7年版の俳句カレンダーの申込み期限が迫っています。句会ごとにとまとめて、担当の桑原優美子さんへお申し込みください（32ページ参照）。また、10月の全国俳句大会の参加申込みの締切りを9月10日まで延長しました。猛暑もあと少しの我慢です。引き続き熱中症対策を怠りなく、元気に秋を迎えたいものです。（規子）

▽7月10日、主宰はじめ東京より9名、静岡より13名の参加を得て富士山

の山開きを吟行した。梅雨の最中ながら晴天に恵まれ、村山浅間神社は多くの人で埋まった。参加者全員に感動していただけるようです。詳細は、本誌62ページをご覧ください。（美穂子）

▽昨年の9月、頭の中は全国大会のことで一杯だった。コロナ後久方ぶりの大会で異例づくめ。受付から会終了までのマニュアルを作った。が、それではカバー出来ない事も多あり、各係の臨機の対処により切り抜けた。係の皆さま、ありがとうございます。今年の大会では、あの経験を生かせるものにと、昨年のメモを読み返しております。（宏子）

▽小板橋泰山さんとは新中央句会で何回か一緒にしたものの、一度も言葉を交わす機会はなかった。彼の訃報を聞いても何事もなかったかのようにやり過ごしていた。ところが、彼の亡き後も、本誌に泰山署名の投稿が掲載されている。今、それらを通して彼の一端を垣間見ている。そこに彼は生きている。来月もまた彼と会えることを期待して。（清晴）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万 象 俳 句 会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万 象 九月号

第二十三巻 第六号

通巻 第二七〇号

令和六年九月一日 発行

主 宰 江 見 悦 子

発行人 江 見 悦 子

編集人 中 村 千 久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一三二一六 603

万 象 発 行 所

☎〇三六三二四一五七九六

令和6年度「万象」全国俳句大会・「万象」同人会総会 案内

開催日

令和6年10月28日(月)

午前11時(午前10時30分より受付開始)～午後4時終了予定

会場

ホテルグランドヒル市ヶ谷(東京都新宿区市谷本村町4-1) ☎03-3268-0117

同人会総会

【交通】JR中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

俳句大会

◆表彰 万象俳句賞 他

万象新人賞

◆披露

新同人・他結社からの転入同人・会員

大会入選作品(特選句に選者染筆贈呈)

一万三千円(昼食代を含む)

申込み

申込期限を過ぎましたが、会場に余裕がありますので、追加での参加申込を受け付けます。

9月10日(火)までに会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。

・ゆうちょ銀行より振込 ゆうちょ銀行(記号)10910(番号)07493091(通常貯金)

・他の金融機関より振込 ゆうちょ銀行(店名)098(口座番号)0749309(普通預金)

口座名義 大久保 進 ☎044-333-11054

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

大会作品

大会作品の募集は8月15日で締め切りました。多数の応募、ありがとうございました。

令和6年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 江見悦子
実行委員長 中村千久